

【再建中】気まぐれビル
ダーのコメディ風、～
剣神の記憶を添えて～

シイナ リオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつも読み専門ですが、ドラゴンクエストビルダーズの二次小説が少ないから、広まるように自分でも書いてみました。

そのままでは大幅な原作コピーになってしまいうので、剣神ドラゴンクエスト設定、オリジナル要素として“うっかり系ルビス様”などを加えています。

二次小説をメルキド編のみでも完結させる事を目標に書きました。

※突貫製作な為、大変読み辛い物ですがご了承ください※

誤字脱字待ってます。

文章力の無さなど至らぬ点はとても多いでしょうが、「物語はこのが良いんじゃない

か？」と思いましたが、是非ともあなたもビルダーズの二次小説をみてはいかがでしょうか？

そんな風に皆さんがビルダーズ二次小説が広まるよう、楽しみにしています。

目次

「始まりは牢獄に墓地を添えて」

1

大地の精霊ルビス様、うっかりを添えて

10

初めての住民

14

髭オヤジ

24

襲撃

32

メルキド荒野

45

兵士の子孫と城塞と……

58

町の発展

71

アレフガルドの料理を復活せよ

81

攫われたピリン

96

ピラミッドと火を噴く石像

102

戦いに備えて

111

スライムのスラタン

122

戦後、さらばメルキド

140

始まりは牢獄に墓地を添えて

暗い世界、自然と夢の世界だと分かった。

—私の声が聞こえますか？—

—私の名前は精霊ルビス—

暗闇に浮かぶ赤い髪にエルフ耳のように長く尖った耳の女性。

—口トの血を引く心優しき少年よ……あなたの手元を見るのです—

一本の剣……赤い宝石が嵌められ、どこか神々しい。

—あなたの手にしているその剣こそ闇を払い、希望を切り開く口トの剣—

—さあ、今こそ旅立つときが来ました。あなたに神の守りあれ……—

そして夢が覚めていく感覚が……。

—……あら？ ……間違った子を選んでしまった気が……—

きょうで6さい、オレはゆうしやになる……。

—や、やつぱり間違っていました!! 10年早いのです!! あなたが旅立つのは16歳から—

—お待ちなさい!! ちよ、まだ夢から覚めてはいけません!!—
 そんな慌てた彼女の声が遠のいていき……

それからは激闘の日々だった。

勇者に憧れる『ももんじや』のモモたんを旅の友に、俺は旅を続けた。

あらゆる剣術を習得し、あらゆる魔法を覚えた。

……そして、竜王の力で変り果てた親友《モモたん》との死闘……。

親友を斬ってしまった、親友を失ってしまった……

あの胸を貫くような深い悲しみと煮えたぎるような怒りが込み上げてきたあの時……。

俺は決心した、『竜王《あいつ》』を絶対に許すものかと……!!

赤い絨毯を敷き詰められた暗い部屋。

その奥の玉座に『仇《ヤツ》』はいた。

「よくぞ来た!! わしが王の中の王、竜王である。

わしは待つておった。そなたのような若者が、現れる事を」

ただ王座に座っている……それだけなのに伝わるゾツとするような気迫《オーラ》。

「もし、わしの味方になれば、世界の半分をおまえにやろう。」

どうした？ 世界の半分を欲しくないのか？ 悪い話ではあるまい」

邪悪なるカリスマ性、甘美なる問いをかけるその声……俺は……。

……

……

……

——ようやく見つけました、あなたの事を……うっかり平行世界に声をかけて剣を渡してしまいました、なんとかありがとうございました——

それはいつの日に聞いた女性の声。

——今は一つの忌まわしき選択が生んだ、闇に覆われた世界。

この世界は空の光を失い、力なき人々はただ、滅びの時を舞っています——

——全てが失われた世界を新しく作るには、あなたの力が必要なのです。

さあ、時は来ました。 さあ目を、お開けなさい……

水の滴る音。

目覚めるとそこは暗い地下、目の前には……墓!?

——目覚めたのですね——

——あなたは覚えていますか？　自分が何者で、自分がどんな存在であったか——

「俺は……思い出せない。　何もかも、名前すらも……」

——……そうですか、眠りにつく前の事は何も覚えて……今、何と？——

「名前すら、思い出せないです」

——おお、なんという事でしょう……名前すら忘れてしまうとは……亡くなった後、剣と一緒に連れ帰ったのが原因でしょうかね？——

なんかとんでもない事を言われた気が……それより名前が無い……自分が何者すらも分からないし……俺は一体誰なんだろうか……？

「というか身体もずっと寝たきりみたいで変な感じがします……まあ、ちゃんと動けはするけど……」

——よかった、あなたは自分の役割を果たす事ができるでしょう——

「役割？」

——長き眠りから覚めたあなたには果たすべき重大な役割があるのです——

「それより、凄く身体が怠いんですけど……」

——確かに、体力が減っているようですね、長い眠りで奪われていたのかもしれないませ

ん——

「薬草はありますか？」

——残念ながら……現代にはもう生えてはいません——

「え……？」

当たり前のように売っていて、一般人には割高ではあるが傷が一発で治る……

土地によっては道端で雑草のように生えている事もあるあの薬草が……失われた？

「じゃあ『きずぐすり』に使う『白い花びら』を摘もう」

周囲に生える何本かの白い花から『白い花びら』を3つ摘み取り、近くにあった『木の作業台』で『きずぐすり』を作ろう。

その瞬間だった。

手が勝手に動き出し、魔法か何か分からないが容器が現れて中に白い花びらがクリーム状になって入る。

『きずぐすり』が完成した。

身体の怠い原因……脇腹の傷に『きずぐすり』を塗ったくり、体力を回復させる。

「ふう大分楽になった」

——この世界に生きる人々とはある切欠で、今のよう物を作り出す力も失われま
た——

「こんな家庭の知恵もか!？」

薬草を使う程じゃないような傷を治す家庭の知恵だ。

※吉崎観音先生作の『ドラゴンクエストモンスターズ+』にて、ぶちスライムに噛まれた傷に薬を塗る第1話のシーンイメージ※

———そうです。そしてあなたの責務は……———

「責務はともかく、早くこの地下から出たいのですけど」

———おお……それもそうですね、ではこの穴倉から出る為に足場を作りましょう。

まず、土を「壊す」のですが、『ひのきのぼう』を作りなさい———

「『ひのきのぼう』って作れるのか？」

そう眩きながらも、落ちている『ふとい枝』を先ほど同様、切り株の作業台で『ひのきの棒』を作り出す。

———今はもう……その武器を作り出すという事も、そして物を壊すという事も人間たちは失ってしまった力です。

世界が闇に閉ざされ、人々は力を失っても、ずっと待ち続けていました……その物を作る力を持つあなたを。

あなたは人々の願い、夢、希望、そして未来を背負っているのです。

貴方が果たすべき任務、それは……———

「zzzz……」

——……あなたまさか、眠っているのではないでしょうね？ 起きなさい!!——

「っは!! つき、聞いてますよ!」

聞いてなかったけど……

——……はあ、仕方ありません……やはりまずはここから出た方がよさそうですね。ではまず土を10個……—

「土が……ブロック状になった!? いや待て、ひのきのぼうが勿体ないし手で掘ろう。

お、切り株も簡単に持ち運べる!! ここの拾えるもの、全部持つていこう!!

ん? がいこつの山があるし、鎖まで……文字は掠れて、読めないな……おお、ここから外に出られる!!

石の階段!? これは新しい素材だ!! っしやあ持つてけるもの全部持ち運ぼう!!」

——つて全然聞いてない!」

☆……………☆……………☆……………

☆……………☆……………☆……………

——よくやりました。上手く外の世界に出る事ができましたね。——

——これからあなたが目にする世界、アレフガルドはとある切欠で光を失い、闇に覆

われた世界……。

光り無き世界に生きる人々は物を作る力を奪われ、今や文明も知恵も無くしてしまつています。

あなたに課せられた重大な使命……

それは、あなたが持つ物作りの力で人々を救い、アレフガルドの世界を復活させる事なのです——

「急に人々を救え、世界を復活させろって言われても……ピンと来ないんですが？」
目覚めたら墓だし、突然そんな色々言われても……。

——……確かに、目覚めたばかりの貴方には少し、急な話なのかもしれません。

貴方が持つ物を作る力で、あなたの自由に思い描いた世界を作り出してください。
そうすればおのずと自らの使命も果たすことができますでしょう。

そして自分自身で確かめるのです。世界に何が起きたのか、そして……自分の役割がなんなのか——

「世界に何が起きたのか……？ 俺の役割……？ それにあなたは一体……」

——私は大地の精霊ルビス。全ては精霊の、導きのままに……——
精霊ルビス……それは知っている。記憶にある大きな宗教の一つだ。

——最後に一つだけ、あなたに忠告しておきます。

あなたは勇者ではありません。この事だけは、忘れないでください——
その瞬間、〃誰かの言葉〃を思い出す

(凄いモジャ!! 流石、勇者だモジャ!!)

(勇者、助けてモジャ!!)

(ごめん勇者……僕はもう、君とは一緒に行けそうにないモジャ……)

——どうしました? なぜ、泣いているのです……?——

「えっ?」と思わず頬に触れると、熱いものが流れていた……いつの間に流れていた
涙。

「何でもないです、さあ、シヤバの空気だ!!」

——出所ですか!?

死体の近くに鎖があったからそう変わらない気がする。

大地の精霊ルビス様、うっかりを添えて

そこは、自然溢れる……というか、殆どもう自然しかない世界。

だが闇の魔力によるものか、空気は重く、とても人が暮らしていけそうにない世界だった。

——ここはかつてメルキドと呼ばれていた場所。

遙か昔、この地には固い城壁に囲まれた巨大な町がありましたが、魔物との争いでその全てを破壊され、今や見る影もありません——

——あなたが持つ物を作る力で、ここに新しいメルキドの町を作り上げ、アレフガルド復活への第一歩とします。そのためあなたにはこれを渡しておきま……あ

……

空から一本の旗が……何処からか来た「キメラ」に攫われてしまい、遠くに飛んでしまった。

——さあ、取りに行くのです!! その旗を持って、あそこに見える光さす地を目指しなさい。

先ほどの旗はこの地で魔物と戦った人々が最後まで掲げていた旗なのです!!——

「ルビス様あああ!! あんた何てことしてくれたんだ!!」

その後

「くそ、見失った……ん? 洞窟……?」

旗を持ち去ったキメラを追いかけ中、洞窟を見つけた。

あまり深くなく、奥には宝箱が置いてあった。

だが宝箱にはドラキー2匹が待ち構えていたように現れる。

それでも眠りに着く前は戦い慣れていた事だけは覚えている。

戦いの基本、相手の攻撃を避けると同時に背後へ廻り込んで攻撃を喰らわせる。

2匹の体力がなくなり、同時に悲鳴をあげて消えた、

「つしや、倒した!! ところで宝箱は……『いのちのきのみ』!!」

食べると体力を増やしてくれるだけでなく、体力も完治させてくれる。これは良い

物を手に入れた。

喜びながら洞窟の外へ出ると、目の前でキメラが通り過ぎた。

しかも口には『希望のはた』を持っていた……。

「あいつう!!」

追いかけて辿り着いた場所は岩がいくつもある広場。

中央には土や石で作られた高台がある……キメラの巣だ。

そこに『希望のはた』が置かれている。

ある程度登っていけるが、高すぎる所は『土』を重ねて登っていく。

お、やつと手に入れ……。

その時だった……

背中に熱い弾丸……メラが撃ち込まれ、落下する身体。

咄嗟に起き上がると一斉に襲いかかってくるキメラの集団……。

ヤバイ

体力がもう僅かな危機を乗り切るには……

そんな時こそ、先ほど手に入れた『いのちのきのみ』だ。

咀嚼し飲み込むと、先ほどまでメラを撃たれ、落下して、突《つつ》かれた体力があつ

という間に回復する。

近くの岩に隠れて観察する。

奴らはメラを撃つ前に呪文を唱える、その時にできる隙と放った後の隙……そして突

《つつ》く攻撃も目の前に二連続で突きの動作をするからこれもまた隙となる……。

奴らの一匹がメラを放った瞬間、飛び出して隙ができたそれを叩く。

一匹が倒されてもそれでも突きを放ってくる奴を避けて叩いて倒す。

そして近くでメラを放とうと呪文を唱える奴も倒した。

こうして、何とか終わった事でやっとキメラの巢の頂上へ向かう。

そこにあつたのは『いのちのきののみ』が入った宝箱と本来の目的である『希望のはた』。

——さあ、あの地に“希望のはた”を立てれば、光があふれ、メルキド復興の拠点となるでしょう。

急いで戻りますよ——

「そんな大切な物を【キメラ】に攫われるとか、何やってるのですかルビス様……」

——その……謝ります、ごめんなさい——

初めての住民

やっとたどり着いた荒廃したメルキド。

キメラと戦った後にもスライムを狩り、『あおい油』を搾ったり『きのこ』や『モモガキ』『ふといえだ』など様々な素材を集めた。

『記憶』ではゴーレムが守っていたのを思い出す。

……なぜか町に来た旅人にも攻撃する奴だった。

それはともかく、町の中央にある光を放つ窪みに『希望のはた』を刺そう。
階段を上り、窪みへ差し込んだ。

……その時だった。

温かな光が周囲に溢れだし、一定範囲だけ重い空気の無い地帯が生まれる。

——光に導かれ、人間たちが集まってくる筈です——

物跡らしき土塊を壊して整地したり、

「なあルビス様、新しい技を思いついたんだよ」

——ああ、ビルド、とうとう技まで思いつくとは……所でどんな技ですか？——

「下に向かって掘る時、範囲4マスを一斉に掘れるんだ。だから4マスをどんどん

掘り進めれば一気に下に行けるんだ!!」

——おおビルドよ、そのような技を身に着けるとは、これで土集めが楽になりますね……所でビルド、あなたはどうかやって上がるのですか？

うふふ、私がうっかりものでしたが、ビルドもうっかり者ですね——

「旗の周囲を建物にして、周囲に階段を作るんです」

——そんな……ビルドもうっかり者仲間だと思つてたのに!!——

そんな色々作業をしてみると、誰かがやってきた。

どうやら俺と同じくらいの女の子だ。

「この旗、いったいなんだろう……」

「君は？」

「私はピリン。この場所なんだか不思議だね。」

とつても明るくて、すつごくあつたかい……」

ピリンと名乗る女の子はボロボロの服を着ていた。

俺も同じボロボロの服だけだ。

「ああ、この旗を建てたらこの周囲一帯が変わつたんだ」

「え？ この旗、あなたが建てたの？ あなたは誰なの？ あなた、いったい何処から来

たの？」

「分からない、直ぐ側に墓だったし……何にも覚えてないんだ、自分の名前も」
名前すら憶えていない……かなりヤバイ状況だ。

「え？記憶が無いの？」

「ああ、ただ精霊ルビスって名乗る人の声に導かれて、ここに旗を立てろって言われたんだ」

「頭の中で声がするなんて、何だか物凄く怪しい感じだけど……」

「それは俺も思う。そしてルビスも怪しい」

——失礼ですよ!!——

「うわ!？」

「!? ど、どうしたの?」

「失礼だつて怒られた」

ピリンは「そ……そう」とちよつと引き気味だった。

それもそうだろう、俺は彼女からしたら一人で勝手に驚いたりする怪しい奴だ。

「……でも、この場所、あつたかくて気持ちが良いし、私、ここに住んでみようかな……」

「？」

「じゃあさつき俺が建てた土の家で暮らすと良いよ。俺一人で住むには多すぎる

し。」

「凄い!! こっこつてみんな、あなたが建てたの!! 頭の中で精霊の声がするとか、少しおかしい感じの人だとは思ってたけど「酷え……」こんな風に町を作れるって、あなたは不思議な力を持つてるんだね!!」

あれ? 怪我してる……どうしよう……私、お花しか持ってない……」

彼女そういつて彼女が持っているのは『白い花びら』。

「3枚もあれば『きずぐすり』が造れるから大丈夫。ありがとう」

「作る? 作るってなあに?」

——私の言葉を覚えていますか? この世界は物を作る力を失った人々……人々に物作りを伝えるのもあなたの役割なのです——

「なら見てて、石の作業台で、さつき倒したスライムから搾った『あおい油』と、拾った『ふとい枝』を組み合わせて……『たいまつ』ができる。これが物作りだ」

「うわあ、凄い!! これが物作りっていうんだね!! ありがとう。わたし、少しだけ分かった気がするよ! 『ふとい枝』だったよね、わたし、集めてみる!!」

ところで名前は思い出せた?」

「いや、まったくだよ……建物を建築《ビルド》したり、一物作り《クリエート》できるのもみんなルビス様から貰った能力《ちから》だし……」

——そうですね、あなたにはまだ名前が無かったですね……実は私もあなたの名前を知らないのです——

ルビス様も知らないのか……

「……そうだ、あなた、ビルドってどうかしら？　これと言って特別な名前じゃないけど……」

「ビルド……いいね、じっくりくる。　ありがとうピリン。　俺はこれからビルドだ！！」

「凄いねビルド、どちらかと言うとぼんやりした感じの顔なのに……でも人は顔じゃないっていうしね!!」

「サラツとティスられたんだけど……」。

それはともかく、住むにはまだまだ足りないな……そうだ、たいまつを置いて、後は寝床を作る……草を編んで、『わらのベッド』なんてどうだ？」

作業台で作り出して見せる。

「一緒に寝れるね」

「っ!?!」

——おおビルドよ、甘酸っぱいですね。　それはさて置き、まさか自分で思いつくとは……

あなたには物を作るだけでなく、何かをひらめく才能もあるようですね。

素晴らしい力です、この力はこれからの町作りにも役立つことでしょう——

「ねえビルド、大丈夫？ ひよつとしてまた精霊の声がしたの？ 目が虚ろで半開きだったから……」

一歩下がって変な物を見るような顔のピリン。

「な、俺つて、そんな事になっていたのか!？」

「う、うん……ほら、しゃんとして!!ぼーつとしてたら直ぐに時間がたっちゃうよ!!」

「あ、ああ。夜までに素材を集めないといけないしな……素材を拾ったり、モンスターを倒したり……」

「うん、これから一緒に暮らすんだものね。

……ねえビルド、この世界に昔……何があったのか、わたしはよく知らないけど悪い人たちがこの世界から光を奪ったせいで、今生きている人たちはみんな自分が生きていくのが精一杯なんだ……。

誰かを助けようとしないうし、協力して一緒に生きて行こうともしないの……。

わたしね、そんなこの世界がすつごくつまらないって思うの!!

だからビルド、町をもつと発展させて、みんなで暮らせたなら楽しいと思わない?」

「ああ、」

「ビルドがいれば夢がそんな夢が叶えられそうなの!! ねえ、わたしも一緒にこの町を作るの、手伝っていい?」

「もちろんだよ」

そんなこんなで俺達二人は共に暮らすことになった。

俺はピリンに戦いを教えたり……

「殆どの敵は正面からしか攻撃できない、だから相手の背後に廻り込んで殴りかかるんだ!!」

「わかった!!」

俺がスライムを引き付けて背後をピリンに攻撃させる。

あまり強くないスライムはピリンの初めての戦いに丁度いい。

「スライムと戦う時は素手で殴る方が効率が良いんだ。

スライムが弱いからだけじゃなくて、素手のが連続で攻撃できるから」

ともに飯を食ったり……

「ぎゅ〜こよこよ」……そんな音と共にピリンが話しかけてきた。

「ふい〜……疲れたね。 ねえビルド、お腹減らない……?」

「ん？ お腹減ったのか？」

「そそそ、そんなことないもん!! ちよつとお腹が鳴っただけだもん!!」

「ああ、さつき一杯木の実を手に入れたんだ。一緒に食べようか」

山のようにあるモモガキ。 50個ぐらいだろうか……ちよつと取り過ぎた。

「あ、『モモガキの実』!! こんなに一杯!! 甘くてとつてもおいしいんだよ。

わたし、お腹ペコペコだったから……」「やっぱりお腹減って……」「頂きます」

恥ずかしそうに呟いてたのに茶々を入れたらちよつと拗ねてしまった。

町に繋がる川をひいたり……

時に新しい物を思いついたり……

「ビルド、こんなに素材一杯ごちゃごちゃしてるの……大丈夫？」

山のように積みあがった素材……確かに良くない。

そんな訳で収納箱を作る。

因みに5種に分けて使っている。

「道具」きずぐすり

「魔物素材」あおい油や羽、モンスターの卵

「植物素材」ふとい枝や白い花びらなど

「食料」モモガキ

「建築資材」土

「家具」わらのベッドや収納箱の予備

ピリンもまた、町の発展の為の事を考えたり……

「ビルド、わたしこの町をもつと発展させる為に設計図を書いてみたの!! 石の作業台をもつと使いやすくできるようにね!!」

とすると、あの広場に立ててみるか。そして扉が必要、草を使って『わらの扉』を作ってみよう。

無論、このぐらいなら5分もかからず作れる。

「うわあ凄い!! わたしの設計図通りのをこんなに早く作ってくれたんだ!!
ビルドが作ってくれたこの部屋で、私も何か作ってみるね」

ピリンと出会い、3日ほど経ってからの事だった。

「人が来ない!!」

俺は街を……ルビス様の加護が及ぶ範囲を窪み状になるよう街を作ったり、遠くから引いてきた川の上を歩ける橋を作ったり、色んな事をしてきた。

だが、流石に3日間ずっとやってきても誰も来ないのは辛い。

「確かに……せつかくビルドが沢山作ってくれても、誰も人が居ないと寂しいね」

「飯もモモガキだけだしな……」

「うーん……実はねビルド。私、ここに来るときに怪しげな人を見たの。」

少し様子がおかしい人だったから声をかけずにここまで来ちゃったんだけど……」

「ヤバイ奴じゃないかな……？　だけど一緒に町を作ろうって誘ったら町の仲間にはなつてくれるかな？」

「うん、確かにちよつとヤバイ人かも……その人は岩山を超えたあたりに居たよ」

だが流石に何もしないのは辛いな。

「よし、行ってみようと思う」

「うん、頑張つてね!!　お弁当のモモガキと、新しい人を見つけた時のお弁当用のモモガキ、もしも夜になったら夕飯用のモモガキと、朝食用のモモガキと……」

見事にモモガキだけだった。

髭オヤジ

海に近い場所を探索する。

そう言えば俺達は森の辺りであれば素材を集めていたからこっちは来たことが無かったな。

遠くには他の島が見える。……ただ俺は金槌だ、泳ぐ事は無理……。

そんな事を頭の中でボヤいているとなにか見えて来た。

「朽ちたバリケード……ここは廃墟か？ 看板もあるが随分と古いな。えっと……」

『「誓いの記」おお!! 悪しき竜王が世界を闇で閉ざしてからどれくらいかの年月がたつのであろう。

世界は魔物たちに脅かされ、わが故郷メルキドもついにほろびてしまった。

竜王によって物を作る力を奪われた人々は急速に文明を失い、今や文字すらも失いかけている。

人間があたりまえに持っていた、物を作る力は、人間のもっとも大切な力のひとつだったのだ……。

私は文明が滅ぶ前にアレフガルドの各地を旅し、世界に起きた事を記録に残していこうと思う。

これはその誓いの記である。

私の旅の記録はアレフガルド歷程という書物としてまとめ、各地に残していくつもりだ。

もし、この誓いを見た者がいれば、私の足取りをたどってくれとうれしい。

すべては大地の精霊ルビスの導きのままに……』

「……メルキドの冒険家・ガンダル……この人は、最後まで抗っていたんだな」

くくく

「たき火が燃えている……この先に、誰かいるのか？」

ピリンが言っていた人物だろうか？

そしてすぐ近くにはあばら家より酷い小屋（？）が見えて来た。

「メモがある……えつと」

『うしなわれた、もじ、というの、なんと、むずかしい、ものなのだ。

めるきどろくを、かいどくするには、おそろしく、じかんが、かかりそうだな』

「これは随分と読み辛い……そう言えばルビス様がこの世界はもう、人間に知恵が無いって言ってたな。」

おっさんの名はロロンド、何やら幻の書物『メルキド録』とか言うドでかい本を持つてる胡散臭いおっさんだ。

「ふむふむ、それで町を作っておるといふのか。素晴らしい!!」

吾輩もその町作りに入れてはくれぬか？」

「うへえ……」

「……むむむ、なんだその、苦虫を口の中で握りつぶしたような顔はッ!!」

「いやそれを言うなら苦虫を噛み潰したような顔だろ!? それになんかうるさそうだから……ヤダ」

「たとえ断られても吾輩はお主の町に行く!! たった今、そう決めたのだからな!!」

どわっはっはっは!! さあ行こう!! やれ行こう!!」

「おい待てオツサン、こんな暗闇の中で出たら迷子に……」

☆……………☆……………☆……………

☆……………☆……………☆……………

「……なっちまったじゃねえか!! ここ、何処だよ!」

「ふむ、すまぬ……」

気付けば毒の沼地に居た。

「ここいつはウドラー!!」

「倒すぞ!!」

アーチ状の何か……。

「これは一体、何なんだ？ ツボや炎は貰っていいこう」

ひとまずこの場所で俺らは休憩する事になった。

まだ夜は明けてない。

「ふむ……流石に腹が減ったとは言えモモガキだけでは飽きるのではないか？」

「贅沢なオツサンだなオイ。 ふうかなんだその本？」

ロロンドのおっさんはデカイ本を持っている、それについて聞いてみた。

「メルキド録は吾輩の一族が代々受け次ぐありがたーい書物だな。」

ここには何百年も昔に失われた物の作り方や、人間の歴史が書かれておる」

「歴史ねえ……」

「メルキド録の記述は実に多彩だな、この書の中にもこだわりの男料理のページがある。」

まあ、吾輩の宝物だからそうやすやすと見せるわけにはいかんがな。 わーっはっ

はっは!!

そこにキノコがあるであろう？ そのページにはそのキノコの調理法も乗っておるぞ。

そんな訳でビルドよ、キノコ料理を作ってみるのだ」

「自分の食事ぐらい自分で作れよ」

「なにい!? とぼけた顔をしておる上で、なさけない! なさけないぞビルドよ!」

「うるせえなあ……わかったよ、作りあ良いんだろ」

そんな訳で作ってみた。

「ぬう!? こ、これは……まつたりとして、こつてりとして、それでいて上品な素晴らしい……かおりだ!!」

「いやまだ食ってなかったのかよ!」

「うむ、褒めてつかわずぞ」

「何様だおっさん……」

そんな話をしてしていると……地が響く音がする……。

現れたのは……

「ぬ、ドラゴン!? ま、まさか料理の臭いに釣られたというのか!」

「つち、どうする……ドラゴンなんて……」

(凄いモジャ、ドラゴン斬りモジャね!!)

そうだ、思い出した……。

「秘儀ドラゴン斬りいいいい!!」

「ギャオオオオオ!!」

断末魔を上げ、倒れ伏すドラゴン。

奴の残したドロップアイテムは……

「なんでソファなんだ……」

なぜかソファだった。

「そうだビルドよ、メルキド録によるとキメラの翼という町へ戻る為の便利な道具があるという。

……む?」

「早く言ってくれよおっさん……」

その後、キメラの翼を作って、直ぐに帰る事になった。

「ぬおおー!! 素晴らしいぞ!! ここがメルキドか!!」

なんと生命力にあふれた場所なのだ!!

この地こそメルキド録に書かれた伝説の都市メルキ」 「それより疲れた……ちよつと、寝る……」 「そ、そうだな……」

俺が藁のベッドに横たわると、オッサンは隣のベッド……ピリンのベッドに入つてし

まう。

勝手に入んなよ……そんな事を思いながらも眠気にはかなわず、まどろみの中に落ちていった。

☆……………☆……………☆……………☆……………

☆……………☆……………☆……………☆……………

「お帰り、ビルド | ビルドが知らないオジさんに寝取られたあああああ!!」

襲撃

「……改めてお帰り、ビルド……（ビルドが寝取られてた……）」

「お、おう……」

「町作りの仲間を見つけてくれたんだね。……凄く胡散臭そうだけど……」

そう言つてロロンドを見ると……一人で「うおおおおー！！！！」と興奮しながらメルキド録を撫でまわしている。

あれは声かけたくはないな……。

「ま、まあ頼りになるんじゃないか？」

「そ、そうだね！！ おヒゲだつて生えてるし、頼りになりそうだよ！！」

「まあ、戦闘ぐらいは何とかなるんじゃないか？」

今まであつた事を話す。

「凄おい！！ ビルド、ドラゴン倒したの!？」

「ああ、殆どドラゴンの視覚から攻撃してたけどな……」

「だが最後は『秘儀ドラゴン斬り』とやらで決めたではないか!! あれは凄かつたぞ、どわっはっはっは!!」

(……ロロンドのおっさんが飛び出して行かなければドラゴンにも会う事なんてなかったんだけどな……)

「しかしビルドよ、物を作る力と言い……お主はまさかメルキド録に書かれた創造の力を持つ伝説の存在……ビルダーなのか？」

「ビルダー？」

「うむ。光が失われ、世界が闇に閉ざされてから人々は年々も何年も待ち続けていたのだ。

いつの日か、大地の精霊ルビスによつて世界を再建するビルダーが遣わされるだろうと!!

……いやいや、こんなとぼけた顔の者をそう簡単に信じるわけにはいかん」

「埋めてやろうかテメエ……」

ロロンドの周囲に土を積み上げる。

「埋めるでない……!! ……まあ道具を作ったり、これほどの町の発展、信じてみよう。

してビルドよ……吾輩がおぬしとともに成し遂げたいことは二つある。

一つは強固な城壁に守られた嘗ての大都市メルキドの華麗なる復活!!

そしてもう一つはメルキドの町がなぜ、滅びたかその原因を探る事だ」

「この町じゃ、まだ駄目なのか？」

「うむ……土の壁ではな……」

確かにちよつと攻撃すれば壊れてしまう。

「嘗てのメルキドは堅い城壁に囲まれていただけでなく、巨大なゴーレムが町の守り神として存在していた筈……。

そんな鉄壁の守りを誇った町がいったいなぜ滅びたのか……。

吾輩はメルキドの末裔として、その事実をどうしても知りたいのだ！

我らの進む道はメルキド録とお主の力が導いてくれるであろう。

それではビルドよ、改めてよろしくな!! ふっふっふっふっふ……わーっはっはっは!!」

そんな訳でロロンドのおっさんが仲間に加わった。

ロロンドのおっさんに言われるままツボや新しい建物を作っていると、何か嫌な気配がする。

「……むむむ……ビルドも気付いたか？」

「ああ。ピリン、部屋に隠れていてくれ」

「う、うん」

「竜王軍……だな？」

——おお、よく気付きましたねビルド、あなたの言う通り竜王軍が迫っています——
『「こんぼう」や『きずぐすり』を作ってる、いつでも大丈夫だ』

——大丈夫そうですね——

現れたのは4体のがいこつ。

ドラゴンに比べれば大した強さは無いが、数は危険だ。

「来るぞ!!」

「ああ!!」

【ケツケツケ】

【人間どもガ、集まツテやがるゼ】

戦いが始まる……

が……

その時、奴らはこの街が大きく掘った窪みにできている事をよく考えてなかったのか、

落下してダメージを受けている。

【ギヤツ!?!】

【痛” え!!】

【うぎゃ!?!】

【ぐエ!?!】

「ばかじゃねえのこいつら……」

【うるセエ!! やつちまえお前ラー!!】

襲いかかるがいこつども。

ロロンドのおっさんが1体を相手し、俺は2体を……しまった、あと一匹が!!

【ぐへへ、お嬢ちゃん。俺の飯にナ】

「いやああああ!!」

ピリンは「正拳突き」を放った。

がいこつは碎け散り、骨の素材のみが残る。

町へ落ちてきて弱っていたとは言え、仲間が幼気《いたいけ》な少女に殴られて倒され、がいこつ達は動揺して大きな隙ができる。

俺とロロンドのおっさんはそこを追撃する事で勝利した。

——ビルドよ、よくぞ町を守り抜きました。しかし竜王軍に目を付けられてしまったようですね——

——魔物たちは人間たちが団結し、嘗ての力を取り戻すことを恐れています——

——きつとこれからはこの町をつぶそうと魔物たちが定期的に襲ってくるようになるでしょう——

——なんとしてでも魔物たちからこの町を守り抜き、いつしかメルキドを支配する強大な魔物を倒すのです——

「しかし俺にできるのか？ 役割とか責務とか、よく分からないし。」

物作りや戦いだって自分がやりたいからやってるだけだ。誰かに命令されてだつたらやりたくはない」

主にロロンドのおっさんにこき使われるのは楽しくない。

——今はまだ、そうでしょう。しかしあなたは人との出会いの中で気が付きます——

——その特別な力は果たすべき役割がある事を——

——……どうやらこの地での私の役割は終わりのようです——

——ここからは仲間たちと協力してあなたが望む街を作り、メルキドの町を復活させてください——

——新しい地で再び会える日を楽しみにしています——

——全ては精霊の導きのままに……——

そう言つてルビス様の声が消え、何かが落ちて来た。

「ん？ 何だこれ……『青の石板』」

ルビス様がくれたのは壊れた石板だった。

「よくぞ魔物たちを撃退した、それでこそおぬしだ!! それでこそビルダーだ!!
しかし、魔物たちにこの町の存在が知られてしまったようだな……」

「次は守りをもつと堅くしないと……と、そう言えばルビス様から石板を手に入れ
たんだったな……」

ロロンドのおっさんに見せてみる。

「なに？ 大地の精霊ルビス様から？」

「何だこれは……いやまで、メルキド録に確かこのページに似たものがある」

そう言つて物凄い勢いでパラパラとページを捲つていく。

「……ほう、『旅のとびら』なるものは、自分が必要とする物がある場所に光の扉が開
くらしい。」

直せば起動できるかもしれん」

足りない部分は『ツボ』と同じ材料を使えば大丈夫かな？

「あ、ビルド。 あつちの壊れた橋の辺りにいっぱい素材集めたんだよ!! 付いてき
て!!」

そう言つて連れられて向かう。

ピリンは先ほどの戦いでも見せたように素手での戦いがとても上手くなっていった。襲いかかってくるスライムが攻撃できないように連続の拳……時たま現れるドラキーを正拳突きで撃退する。

「どうかなビルド？ 私、強くなったんだよ!!」

「凄いよピリン。正拳突きって事は武闘家の才能があつたんだな」

「ぶどう？ 私ね、ビルドに書いて行きたいの。ダメかな……？」

「ここまで強くなった彼女なら大丈夫だろう。」

「大丈夫、というか多分、俺が武器さえなければピリンのが強いよ。よろしくピリン

!!」

「着いて行って良いの!! ありがとうビルド!!」

そんな話をしていると、目当ての橋に辿り着く。

橋の先にはブロックが置けない魔法がかかっているらしい。

それはともかく、その近くに置かれたピリンの集めた素材の収納箱……。

大量だった。青い油やふとい枝、いろんな素材が盛りだくさんになっている。

「あれ？ ビルド、誰か泳いでくるよ？」

「ん？ 本当だ（俺も泳げたらなあ……）」

陸地に着いた誰かは男だった。

「遠くに見えた光を指して泳いでみたら、こんな場所に町があるなんて……」

「あんたは……？　俺はビルド、こっちはピリン。町にはロロンドっておっさんがいる」

「俺はロツシ、お前ら、こんな所で何やってんだ？」

「私達、町を作る為の素材を集めてたの」

その時、ロツシは変な顔をした。

「……へっ!!　随分とくだらねえことしてんだな。人間が協力して暮らすだなんて」

「くだらねえだって!!」

「この世界じゃ、自分が生きるのが精一杯なのさ。」

他人の事なんか構っちゃいらねえはずだ」

「そんなのつまらないよ。だから私達はみんなで楽しく暮らせる町を作ってるの!!」

「……とは言え、歩きすぎて疲れまぢまった。」

少しの間、俺もその町とやらに居させてもらおうとするぜ。……まあ、長居する気は

ねえが……よろしくな」

そういつて町へ歩いて行った。

「ねえビルド……あの入、口では嫌そうにしてるけど本当は寂しいんじゃないかな？」
 「そう？」

「多分、何かあったんだと思う。きつとそうだよ」

あんな風な言い方されて複雑な気分だけど

、まあそれはさて置きロツシが仲間に加わった。

☆……………☆……………☆……………☆……………

☆……………☆……………☆……………☆……………

暗い闇の中に光が見える。これは……夢か。

『……………え？ なんですって？ 王様の話を忘れた？』

お願いしますよ……大事なことなんですから……では私から失礼して、うおっほん。

その昔、伝説の勇者ロトは神から『ひかりのたま』をさずかり、この世界を覆っていた魔物たちを封じ込めたと伝えられています。

しかし、いずこともなく現れた悪の化身、竜王がその玉を闇に閉ざしてしまったのです。

このままでは世界は闇に飲み込まれ、やがて滅んでしまうでしょう。

竜王を倒し、『ひかりのたま』を取り戻す、それがあなたの使命なのです!!
国中の人々があなたに希望を託しています。

どうか竜王を倒し、この世界を救ってください!!』

何を言ってるんだ？ まあ、伝わってるだけだろう。

魔物も人も、心を通わせれば……。

《一緒に居ると、楽しいモジャ!!》

一緒に……いると……。

遠い記憶の、断片……。

矛盾する二つの記憶……どちらが俺の記憶なのか、それとも両方とも俺の記憶じゃないのかよくわからない……。

「るど……ビルド!!」

「ん……ピリン……」

「泣いてるの?」

「あれ……なんで、涙が……何でもない、何でもないよ。　そうだ、今日は旅のとびらで別の所に行くんだったな」

旅のとびら専用の部屋を作っていた場所に既にロロンドのおっさんとロツシは待つ

ていた。

「じゃあ直すか」

そもそもツボと同じ素材……土と青い油で直るかは心配だが、ビルダーの力を使ってみると、

思ったよりもすんなりと『青い石板』は『旅のとびら・青』へと修復された。

「おお、なんとこの神秘的な輝きなのだ!!」

「二宿一飯の礼だ、この先は俺が下見してくる」

興奮するロロンドのおっさんはさて置き、ロツシはそう言つて旅の扉を通つて行った。

「うむ、準備は良いかビルド？ 新たな土地とこの拠点を行き来できるようになった。新しい地には新しい素材があり、新しい素材があれば新しい物も作れる。

とびらの光は今、お主が求める物を得られる場所に繋がるといふ」

「俺が求めている物……？ とりあえず固い岩やブロックを壊せるものかな？」

「それは『おおきづち』だろうな」

そういつて先ほど向かったロツシ。

「もう帰つて来たのか？」

「ああ、どうやら『メルキド荒野』に繋がってる。

俺が昨日まで泳いで渡つて来た場

所だ……」

「それは……運が無かったね……」

ピリンが気の毒そうに呟いた

確かにそこで待ってたら泳がずにこつちに來れたかもしれない……。。

「うむ、おぬしには旅のとびらの先で『おおきづち』の作り方を調べてきて欲しいのだ。

その『おおきづち』なら硬い木や岩を砕いて素材にできるだろう。」

「『おおきづち』の作り方はその名の通り、魔物の『おおきづち』に聞いた方が良いだろうな」

「おおきづち？ おおきづちがおおきづちもっておおきづちが……？」

わけわからん……

「知らないのか？ 紫の毛皮を着て、木の槌をもった魔物だ。

俺が居たメルキド荒野にはその魔物の『おおきづち』の里がある。

……そういえばあそこに人が居たのを見たな……気になれば行けばいい」

「そうか、ありがとう。 さあ、行こうかピリン」

「うん」

メルキド荒野

「ここがメルキド荒野なんだね」

「お、宝箱がある……これは玉？古い紙もある……」

『メルキドの荒野を旅するものよ。この宝箱に入っていた導きの玉は地面に置くとコ
ンパスにその位置が示される不思議な玉だ。』

道を失いかけた時や、もう一度訪れたい場所がある時、この玉をその地面に置けば目
印となるだろう。

この記を目にする冒険者の成功を祈る』

ふむふむ、これはガンダルからの贈り物か、この玉を設置すれば目印になるのか……
ってあれ？ ピリン、その油は？」

ピリンが持っていたのはスライムから採れる青い油ではなく、オレンジ色の油……赤
い油とも言つとこう。

「そのスライムから採れたの」

指さす先に居たのはオレンジ色のスライム。スライムベスつて言うのか。

スライムベスを狩って油を搾ったり、こちらを見れば襲いかかってくるしりょうの騎

士を倒したり……。

「あの紫の毛皮を着た魔物……あれがおおきづちかな？」

と近付けば「ニンゲンだー」「ブツ殺せえ!!」と滅茶苦茶凶暴で話を通じなかつたり

……。

「おおきづち（魔物）見つけても、全然話を通じないのばかりだね……」

「みたいだな……ん？ あの土の塊はなんだ？」

近くにスライム型というか……おおきづち（魔物）型にも見える。

「……退屈だぜ」

声？

声の方向には大きな土の塊のような……家（？）があつた。

「看板……『おおきづちの里 あんないじよ』？」

「おお！お前はニンゲンじゃないか！」

どうやら話を通じそうな奴だ。

「ねえ、案内所なんだよね？ちよつと聞いていいかな？」

「ん？良いぞ、俺は昔からニンゲンが嫌いじゃない。で、何のようだ？」

「ああ、おおきづちの作り方を知りたいんだが……」

「なにいいいい!! お、おおきづちの作り方が知りたい……だどっ!？」

そんなに重大な秘密だったのか……？ まさか、彼らの武器にして、種族の名であるそれは――

「おおお前は、ななななんてエツチな質問をする奴なんだ!!」

「へ？」

「はあ!! いやいや、そう言った意味じゃねえから!! お前が持つてるその木槌の事だよ、木い槌!!」

「……ん？ ああ、なんだ。 おおきづちつて俺達が持つてるこれの事か。

これの作り方ならこの先に住んでる長老が知ってるはずだぜ。

長老の家は屋根に『かがり火』があるから、その炎を目印に探してみろよな。

あ、おおきづちの中でも赤い毛皮の奴ら……ブラウニーは強力だから気を付けろよ
全く、なんて勘違いされたんだ……

「ねえビルド……おおきづちは何を勘違いしたの？」

「ピリン、まだお前には知らなくていい事もあるよ……ましては他種族の配合なんて話は特に……」

「？」

ピリンの純粋な目が染みる。

☆……………☆……………☆……………

☆……………☆……………

おおきづちの亜種……ブラウニーとの戦闘中、ピリンとは離れ離れになるわ、崖から落ちてしまった。

……ん？

「おお、君はニンゲンだね？　僕は長老と同じでニンゲンのことは大好きなのさ。だけど……君もこんな所に落ちちやうなんて大変だったね……」

良かった、好戦的じゃないおおきづちのようだ。

「ああ、結構痛いしな……お、あんなどころに宝箱……つと、命の木の实か」

「わあ、早い!!　君、得意なのかい？　その木の実はプレゼントするよ」

「まあ、得意だな」

「今度は落ちないように気を付けてね」

「ああ、所で長老の場所はどこだ？　炎が目印とは聞いたが、見つからなくて」

「あつちの方にあるよ」

「ありがとうさん」

そう話しているとピリンが「さっきの梯子、いっぱい集めて来たよー」といくつか投げしてくれる。

橋を登っていくのもありだな。

「でもピリン、その梯子、何処で手に入れたんだ？」

「ふふふ、私も『作る事』ができるようになったの!!」

☆……………☆ピリンの回想☆……………

☆

大きなブラウニーという魔物との戦闘でビルドと離れ離れになっちゃった。

そんな中、長老の家じゃないけど他のおおきづちのお家を見つけたの。

『おおニンゲン、よくここが分かったな。』

オレたちはおおきづちの兵隊なんだが、訳あつてここに隠れている……』

『どうして?』

『実はな、外にいるがいこつどもがオレたちの事を虐めるんだ。』

最近竜王様の配下になった癖に生意気だつて……』

『頼む! オレたちがここにしていることはがいこつや長老には黙つててくれ!』

『ニンゲン、どうしてここに入つて来たんだ?』

実は俺は長老にニンゲンを見たら強力でやれつて言われたんだ。

お前、『はしご』つて興味あるか? 作り方を教えてやろう』

☆……………☆回想終了☆……………☆

「つて訳で私もビルドみたいに物を作れるようになったの、これでビルドのお手伝い

がもつとできるね!!」

「ありがとう。ん？ あれが村長の家かな？」

話していると多分、村長の家に辿り着く。

「でか……」

「ふおお、これはめずらしい。お主は人の子か。滅びを待つ哀れな人間よ、ワシに

用か？」

そこに居たのはドデカイおおきづちだった。

「……あ、ああ。おおきづち（木槌）の作り方を知りたいんだ」

「ふおおお、おおきづち（魔物）の作り方を知りたいと!？」

まずはの、いきが良くてピチピチとしたおおきづちのを腹這いにして——「ストオオオ

オツプ!」ふおお？」

「違う、そうじゃない!! その木の槌!! 木の槌だから!! 〃配合〃の過程なんて聞

いてないから!!」

「ふおおお! おぬしが知りたいのは道具のほうのおおきづちか!

……おおきづちは我らが秘宝、そう簡単には教える事はできぬよ」

「なん……だと……」

どうする……俺は、ここで終わってしまおうのか……。

俺は思わず膝を着いた……2階もおおきづちの作り方を間違われた挙句、教えて貰えないだなんて……。

「……ふおおお……何もそこまで分かりやすく落ち込まずとも……そうじゃ、その天井を埋めてくれればやろう。

藁床で埋めてもらえるかの？ 周囲に生える『ツタ』を加工してできる『ひも』と『で作れる筈じゃ』

「お、それでいいのか？」

「うむ、そうしたら教えて——『できたし、修復もしたぞ』早いおう!？」

いとも簡単にやってのけるとは……まさかおぬしは伝説のビルダーなのか？」

「ああ、知ってるのか？」

「……うむ。だがそのような事はどうでもよい事。

おぬしの事もワシは見なかった事にしよう。

人間は力を失い今や滅びを待つ存在、かたや我々はその数を増やす一方じゃ。

ワシはな……人間と我々の今の在り方が必ずしも正しいとは思えぬのじゃ。

人間が多すぎるのも確かに困る。しかしこのままでは世界の調和という物が……」

「zzzz……」

「ビルド、ビルド……」

「ん……あ……？」

「お主今、完全に眠っておったな……？」

「小難しい話は苦手で……」

「まあ良い……おおきづちを上手く使ってビルダーとしての物作りに励むが良いぞ」

そんな訳で『ふとい枝』3本からおおきづち（木槌）を作り出し、周囲の岩を石材にしたり、銅の鉋脈から『銅』や『石炭』を採掘したりする。

採掘してるうちに『炉と金床』を作る事を思いつく。これがあれば金属の精製とかできるんじゃないかな？

そんな訳で再び長老の家の上にある石の作業台を借り、『炉と金床』を作って置こうと

……

その瞬間、不思議な力で弾かれた。

「あれ？　なんで置けないんだ？」

「この建物から1段しか積めないみたいだね？」

「ふおつふおつふお、それ以上置くことができなくなってるようじゃな」

長老が来た。

「置けない？」

「うむ、竜王様によって海が随分と高くなってしまった為に分からなくなっているが、この大地はただでさえ高いのじゃ。

だからその高さの物を置こうとすると世界そのものの不思議な力で弾かれてしまうのじゃよ」

「ちよつと窮屈な世界だな……（俺、泳げないし）」

「おつと、ビルドに言い忘れておつた、ワシ等おおきづちの里には宝物庫がある。

その宝物庫に我らおおきづちの宝である設計図があるのだ。

ビルダーならばそれを使えるであろう」

「そんなに大切な物、いいの？」

ピリンが不安そうに聞く。

「うむ、物作り好きな者達はみんな他の土地へ送られてしまったのでな……。

目印に『井戸』が乗った、入り口の無いおおきづちの家がそれじゃ。では元気での」

「何から何までありがとう長老さん」

「ありがとう!!」

こうして俺達はおおきづちの宝物庫へと向かっていった。

先ほどと同じように土で作られた、おおきづちの家らしき物がある。

上には井戸が乗っており、これが長老が言っていた宝物庫だろう。

「入り口は無いな……いや、これはもしかして……」

土の壁を掘ってみると、中には看板と宝箱。

看板には『おおきづちの里 ほうもつこ』と書かれていた。

宝箱の中には一枚の設計図が書いてある。

『おおきづちの台所』……持つてる素材で作れそうだな。

石材で『石のテーブル』や『石のいす』も思いついたし」

「私、料理してみたい!!」

「ああ、ピリンに任せるよ」

「土と青い油と、コウモリの翼を——「まずは俺が居るところでやってね」えー」

食べ物とは言えないナニカができそうだ……。

「次はどうするの?」

「ああ、実はな……ロロンドのおっさんに教えて貰った道具を作ろうと思うんだ。

それは『大倉庫』、収納箱の何倍も入る優れた道具。 毛皮やツボは揃っているけど、

木材を調達しないとな」

それから大倉庫を手に入れ、大量に素材を手に入れる事で俺達は荒野を探索した。

墓地

「これは……墓地か？」

「おお！ニンゲン！ 君が最近この辺りをうろろしてると噂のビルドだね！」

実はぼく、このメルキドで死んじやった人間たちにお墓を建ててあげたいんだ。

でも、お墓の立て方はよく知らないし、この墓地も荒れ放題になっちゃって……

そこでねビルド！お墓の立て方を知っているブラウニーに話を聞いて、この場所にお墓を建ててみてくれないかな？

きつと一度見せて貰えば、僕もお墓を建てられるようになれると思うんだ！

お墓づくりを知っているブラウニーはドムドローって場所の奥地にいるよ」

「ドムドロー……聞いたこと無いな……」

一瞬砂漠が思い浮かんだ、死の砂漠って呼ばれてる名も無き砂漠地帯……二つの記憶が交わるが、一体どういう事だ？

「そこは凄く遠いし、お墓作りも大変だからもしも気が向いたらで良いからね!!」

それまではここのを貸してあげるよ」

「いいのか？」

「ぼくはここで待つてるから、お墓が作れるようになったら新しいのを建ててあげればいいんだよ」

俺は分かったと良い、6つ石の墓を貰った。
いずれ来た時、9つにして返してあげよう。

色んな所で銅や石炭を掘っていると、洞窟を見つけた。

「明かりがある……？」

進んで行くと……死体があった。

近くには『カベかけ松明』がメラメラと燃えている。 どうやらこれの明かりだった
ようだ。

「これは……ん？ 本？」

古ぼけた本を見つけた。

「えつと『ああ、なんて素晴らしいんだ!! 洞穴の奥は銅や石炭にあふれている! ひ
のきのぼうやこん棒では固くてとても壊せるものではないが、強い武器で上手く壊して
素材にすれば、色々な物作りに使う事ができる! 銅や石炭は人間が今よりもっと発展し
ていくための鍵になるだろう!』ってある」

「とつても古いし、随分と昔に書かれたみたいだね」

遺体を埋葬し、周囲の鉱石を全て採掘した後『本』と『カベかけ松明』も欠かさず
回収する。

その後も時折、俺に敵意剥き出しのおおきづちや、近い種のブラウニーを倒して毛皮を手に入れる。

装備も『どうのつるぎ』『かわのよろい』『かわのたて』と揃い、ピリンも『かわのよろい』を装備している。

彼女はどうかやら『かわのたて』や剣は装備できないらしい。

「ねえビルド、あそこに人影があるよ？」

「人影？　もしかしてロツシが言ってた奴かな？」

兵士の子孫と城塞と……

向かってみると確かに人だった。

「……か……ん？　おーい!!」

「く、来るな!!　……ここは危ない!!　早く逃げるんだ!!　早くしないと……死ぬ

……ぞ!!」

現れるがいこつ達。

だがピリンの正拳突きと俺の銅の剣によってあっさりと倒された。

こいつらは2段のブロックに乗って攻撃すれば一方的に攻撃できるから簡単だ。

【ま、まさか……!!】【に、人間如きに……!!】

という断末魔を上げ、がいこつは『ポロの布』を落として消えた。

「おお……凄いいじゃないか……」。

魔物たちを……倒してくれたんだ……ね……

状態のいい『ひのきのぼう』をひろってね。調子に乗って魔物に戦いを挑んだらこの

ザマさ。

キミはまぐれで勝てたかもしれないけど、やっぱり人間は魔物にはかなわないみたい

だね。

お互い魔物に手を出すのはやめて、ひっそり生きて行こうじゃないか。

それじゃあさようなら。これからの君の幸運を祈っているよ」

「待ってくれ!! 俺はあんたを探しに来たんだ。旅のとびらの先に人間があつまる町がある」

「それで僕のことをわざわざ探しに来てくれたのかい？」

「……わかった、どうせ行く当てもないんだ、君たちに付いてくよ」

「よろしくね、ケツパー。私はピリンだよ」

「よかった……俺はビルド、あんたは？」

「僕の名はケツパーだ。よろしく頼むよ」

「ところで町作りの役に立つ物を知らないか？」

「そうだな……あっちの方で城壁があるんだ、案内するよ」

旅の途中、ケツパーにも装備を揃えた時、何かがあつた場所に来る。

「これは……古戦場か？」

その時だった、地面から巨大な魔物が現れる。

「サソリ!!」

「うわ、【おおてつさそり】だ!!」

とかあったけど、装備を揃えた3人でかかれれば大した戦いでもなかった。

「ふう、倒せた……なあビルド、今の回転攻撃で思いついたんだが、回転斬りって剣技はどうだろうか？」

「回転斬り？」

「ああ、攻撃をしばらく溜めて……離す!!」

その瞬間、先程のおおてつきそりのように回転して攻撃をする。

「回転して周囲を破壊する……素材集めの役に立つ筈だよ!!」

「これで……おお!! 凄い!! ザクザク採れる!!」

古戦場に残る残骸は城壁の壁という素材。

これで壁を作れば相当良い物ができそうだ。

「……って、みんな取ってたらすっかり夜になっちゃったな」

「ねえビルド。丁度直ぐ近くに家があるよ、あそこで休もうよ」

着いてみると誰もいない……まあ良いか、少し修復すれば休めるだろう。

ん？ メモがある、読んでみよう。

「えつと『いわやまの、さきにある、じょうさいから、ぼくはどうか、ここまでにげてきた。』

あそこはやばい……あのじょうさいにはマモノがすんでいる。

あのじょうさいはメルキドのにんげんのさいごのきぼうだとおもっていたのに……。あそこにはながあつてもちかづかないほうがいい。』かなり昔に書かれた物だな」ピリンは料理をしてきている。

時々俺が見てないと、土やら青い油とかとんでもないものを入れた創作料理ができあがるから注意が必要だけど……。

因みに今日の献立は途中で採れた『まめ』を茹でて『えだまめ』を作り、

『くすりの葉』と『モモガキの実』から『森のサラダ』。

そしてキメラから出た卵の目玉焼きも焼いた豪勢な食事になった。

見かけた洞窟に鉱石を取りに行っていると再びメモを見つけると。

「またメモだ『なんとか、あの城塞から逃げ出すことができた……。』

あんなところで暮らすよりも一人で野垂れ死んだ方がマシだ。

しかしもし、ここにオレの屍が無残に投げ出されていたら、墓を建てて埋葬してくれると嬉しい。

俺の願いを聞いてくれれば、あの城塞から持ち出した宝をやろう』

これは……さっきのメモよりも読みやすい……文字が奪われてなかった人か……墓でも建ててやろう」

「持っているのか？」

「ああ、つていうかおおきづちから借りたんだ。

自分で作れるようになったら、新しく作ってあげるって約束でな」

俺が建てた瞬間、男が現れた。

「人が現れた!?!」

「……何処に?」「……どこにも居ないじゃないか……」

ピリンとケツパーには見えていないのか?

「……ん? ここは……? 俺は一体……おお! そうか!」

お前が俺の屍を吊ってくれたのか。ありがとう……約束通り、俺の宝をやろう。

お前が何者かは知らないが、旅の無事を祈ってるぞ……全ては精霊の導きのままに

……

「消えた……」

まるで霧のように……。

「……もしかして君、幽霊がみえるのかい?」

「でもルビス様の声が聞こえるビルドだから……無くはないかも……」

ピリンは俺なら何でもありだと思ってるかい?

「しかしあれ、幽霊だったのか……さ、先に進もう」

その後は『小麦』を見つけ、パンが食えると喜んだけど『料理用たき火』ではパンが

焼けなくてがっかりしたり、

鉱石がほとんど無い外れの洞窟に入ってしまったりとなんだかんだあった。

そして……

「ここが城塞です」

ケツパーの言葉通り、目の前には城塞が立っている。

随分と古く、ボロボロで穴だらけだ。

「……あれ？ 人がいる……」

「ビルド、また？ 見えないよ？」

「うん、見えないね……どこにいるんだ？」

「ほら、あそこにケツパーと同じ帽子被ってる。話しかけてみるよ」

「どこにも居ないじゃないか……おいおいビルド……もしかしてそれ、また幽霊なんじゃ……」

なあビルド、俺はその洞窟で素材を集めてるから……」

「私もケツパーに着いて行くよ」

そんなわけでケツパーとピリンは洞窟へ、俺は幽霊の所へ向かう。

『無念だ……無念だ……あまりにも無念だ……この無念さを伝えられないのがまた無念だ……』

兵士は何やらつくりかけの物の上にいる。

「何が無念なんだ？」

『おお!?! ひよつとして君には私の姿が見えるのかい!?!』

私はこの地をまもるべく、竜王軍と最後まで戦ったメルキドの兵士だったんだ。

町を守る石の守りを思いついた矢先に魔物にやられてね……それが無念で仕方ない』

やはり幽霊だったらしい。

「石の守り? 役立つかもしれない、教えて!!」

『おお、君が受け継いでくれるのかい!?! よかろう。』

まずは『石垣』とトゲわなで私の足元にある石の守りを完成させてくれ』

言われたのでその石の守りとやらを作っていると、ピリンとケツパーが洞窟から逃げている。

二人の後ろには10体は超えるブラウニーやおおきづちの大群だった。

「う、うわああああビルド、助けてくれ!!」

「群れに出くわしちやったの!!」

ブラウニーに追いかけられたケツパーとピリン。

流石に二人じゃ無理だ。

『丁度いい、魔物をここまでおびき寄せるんだ』

「ピリン、ケツパー、捕まれ!!」

「ありがとう!!」「感謝する!!」

【こんな壁、壊してやる!! 痛てて……】

【こ、壊せないぞ、痛た……】

【も、もうだめだ……】

次々とブラウニーがやられ、どうやらうまくいったようだ。

『どうだい! 魔物が堅い壁に引つかかっているうちに、トゲわなでダメージを与えて倒すっていうしかけさ』

「そういえば、その城って誰の城なんだ?」

『この建物はお城というより、人々が魔物から身を守るシエルターだったんだ。』

メルキドを破壊された人々は、最後の砦として何とかこの城壁を作り、中に閉じこもって魔物たちの攻撃から逃れようとしたんだ……。

「だけど……やがてこのシエルターにも、とあるマモノが現れて……おつとすまない、ずいぶん陰気臭い話をしてしまったね』

「(マモノ? さつきまで魔物って言ったのに、マモノ?) 設計図があればなあ……」

『それなら城に居るロロニア様に聞いてみてくれ』

「ロロニア? ロロンドのおっさんみたいな名前だな……先祖か?」

『ありがとう、死人の私に付き合ってくれて……嬉しかったよ……』
スウつと兵士の幽霊は姿を消していった。

「これは……酷い」

「どこもかしこも死体だらけじゃないか……!! ……ビルド、お前はロロニアとかいう幽霊に会うんだよな？」

「私達は見えも聞こえないから、骨を埋葬してくるよ」

「ああ、わかった。頼んだ」

ピリンとケツパーに周囲の死体の埋葬を頼み、ロロニアという幽霊を探す。

そんな時、床に散乱したのを見つける。

「これは……本にメモ？ あつちにも、こつちにも

『アレフガルド歷程

おお！我が故郷メルキド！私は滅びたと思っていたメルキドの奥地でシエルターとして作られた城塞を発見した。

どうやら私の留守中に人々は最後の力でこの大きな城壁を作り上げ、魔物たちの脅威から逃れるためにその中に閉じこもって生活をしていたようだ。

しかし……閉鎖された城塞の中に暮らす人々はどこか様子がおかしい……私が話しかけても目は虚ろで、持っていた食料を奪われそうになってしまった。

これも魔物の恐怖の中、閉鎖された空間に長く居続けたせいなのだろうか。

そんな恐怖にとらわれた人々が暮らすシエルターの中で、メルキドの守り神であるゴーレムがどこか悲しげに座っている姿が印象的だった。

メルキドは愛すべき我が故郷……。

しかし、故郷の人々が住む場所だからとはいえ、ここに長居すると良いことはなさそうだ。

よからぬことが起きる前に私は次なる地へと歩みを進める事にする。

メルキドの冒険家ガンダル』

ガンダル……ん？ ゴーレムは一体どこに行つたんだ？

それに、何でこの本がこんな所に落ちてるんだ？

『がんだるとかいえばうけんしやから、かいていたほんをとりあげてやった、

あいつがかくもじはおれたちではよめなかつたが、

あのおとこ……おれたちのわるぐちをかいていたにきまつている！

こんなことならあのおとこ。にがすんじやなかつたな……』

なるほど、この人物が本を奪ったからガンダルの本がここにあったのか。

しかし、これは……読めもしない文字で、疑心暗鬼になってるのか？

他にも何枚かメモを見つけたけど、人……と言うより幽霊も見つけたので、後で読む事にしよう。

「なんともむなし……ん？　ほう……そなた、ワシのことが見えるのか。

そなたは普通の人間とは少し違うようだな。

吾輩はかつてのメルキドの町長口ロニア。　ぞくにいう亡霊というやつだ……わーっはっはっは!!」

「すげえ……口ロンドのおっさんそっくり……」

「口ロンド？」

「あんたの子孫じゃないのか？　一族が代々受け継いでるっていうメルキド録って本持ってたぞ」

「おお！吾輩の血筋はまだ続いておったか!!　そしてそなたがメルキド録に書かれていたビルダーだと申すか。

してビルダーよ、この滅びた城塞に何の用だ？　ここは人間が自らで自らを滅ぼした嘆きと悲しみがあるだけだ」

「兵士の幽霊があんたに石の守りの設計図を持つてるって言ってた」

「……そなた、何故に町を作る？ そなたは何故に物を作るのだ？」

「それは……」

「ビルド、少し吾輩に付き合ってください。そなたに見せたいものがある。

この城壁の屋上で待っておる。そなたの力なら昇ってこれるであろう？」

「ふう、着いた……」

「よくぞここまで来た……若きビルダーよ。

この屋上からの景色をそなたに見せたかったのだ。

見るがいい、この空を。どこまでも続く暗き雲に覆われた世界を……」

「ああ」

「かつてこの世界は素晴らしく美しかった。

人々は美しい大地に美しい「町を作り生きてきた、。

しかし……今やその全ては破壊され、人々は滅びを待つ無力な存在になってしまっ
た、

ビルドよ、そなたがビルダーであるなら、空の闇を晴らし、美しい世界を復活させて
くれ」

「……使命、か……」

「使命などとは言わん、ただ困っている誰かを少しずつ助けていけばいい。

お前はただ、それを積み上げればよい。そう……そなたが積み上げるブロックのよ

うに……」

「ああ、そうだな。上手いこというな、あんた」

「吾輩も我ながらうまくいことを言った気になってしまったよ。さあビルド、この宝箱にお前の求める設計図がある。

さらばだ若きビルダーよ。そなたが作る新しい世界の誕生を待つておる」

呪いで閉じられていた宝箱は光を放ち、本来の宝箱の姿へと姿を変えた。

中には設計図が入っている。

「ビルド、全部埋めてきたぜ」

「ああ、ありがとう。じゃあ帰ろうか」

「そんな時……再びドラゴンが現れる。」

……だが、武器も新調し、新たな技、ロロンドのおっさんよりも戦いの上手いケツ

パー、

そしてトドメはピリンによる正拳突きによってドラゴンはいとも簡単に倒された。

……そして何故か落としたのは『暖炉』だった。何故で!?

町の発展

ケツパーを仲間にしたたり、シエルターに行ったり、ドラゴンを倒したりと色々あった。今回の旅も終わってメルキドの町へ帰って来る。

「ただいまロロンドのおっさん」「ただいまロロンド」

「ビルド、ピリン、随分と遅かったではないか」

「ちよつとね……」

そんな会話の中、ケツパーが随分と騒いでいる。

「これが君が作った町か!! 予想以上だ!!」

ここにいると力が漲る!! 頭もスッキリとさえてきた気がするぞ!!

ありがとうビルド! 僕もこれからはみんなと一緒に住ませてもらうよ。

僕はメルキドの衛兵の子孫だ。町を守る役目なら任せてくれよな!」

そうワクワクしながら早速、町を襲いにきたがいこつを駆除してくれている。

そんなケツパーをどこか冷めた目で見ながらロツシがやってきた。

「ついに新しい仲間を連れて帰ってきたようだな、ビルド。」

……しかしアイツのあの服装……兵士気取りだったりしないか?

だとしたらまた危険なのが来たな……あんなやつ場所、教えるんじゃないか」
「ロツシは再び嫌そうな顔をしている。」

「なんでだよ？ アイツ良い奴だし、一緒に戦ったぞ」

「人間は集まるとろくなことがねえ、それが戦いたがりならなおさらだ」

「う……確かに、ひのきのぼう手に入れて調子に乗ってたな……」

「お前、どうして城塞都市だったメルキドの町が滅びたか知ってんのかよ？」

悪いことは言わねえ、これ以上は人を集めたり、大きくしたりしねえことだ」

「もしかして、シエルターのことを言ってるの？」

「……お前、あそこに行つたのか……？ ……とりあえず苦勞を掛けたなビルド、一応

礼だけはしておくぜ」

そんなロツシは何だかんだ言いながらも町の発展に手を貸してくれている。

「しかし、結構人も増えたからそろそろ部屋を作るか」

「夜になると町のみんなの様子が気になって、なかなか作業に集中できないから……」

みんなそれぞれの部屋があつた方がいいかも」

「じゃあ次は個人の部屋を作ろうか」

まず床底で形にするか決める。

ただ四角いと豆腐になるからいくつかの四角を合わせる

「よし、できたよピリン。見てごらん」

「うわああ!! ありがとうビルド!! 私専用の部屋を作ってくれたんだ!!」

「まあ、女の子が男どもと一緒に暮らすのもちよつと大変だしな。」

「……ケツパーは夜通し警備しそうな勢いだし、そういうやロツシは時々寝ながら絶叫する。それでもつてロロンドのおっさんはひでえいびき。」

「俺の寝相はどうかは知らないけど、まともに寝れないだろ?」

「う、うん……それに、夜の作業もちよつと集中できなかったし……特にビルドで……」

「俺の顔を見ながら顔を赤くするピリン……一体俺は何をしたんだろうか……?」

「作業?」

「えへへ、それはまだ秘密!! 準備ができたなら教えるから、楽しみにしててね!」

ピリンは嬉しそうに部屋に入っていった。

「そうだおっさん、ケツパーとの旅でこんなものをロロニアつて幽霊から貰ったんだが……」

「ロロニアとは吾輩の……つておぬし、幽霊が見えるのか!? いやいや、それよりそれ

は『石の守りの記録』!! よくやってくれたビルドよ!! して、どんな旅だったのだ……?」

今回の旅で起きた事を話すとどれも「ぬおおお!!」とか「ぬううう!!」とか、相変わらずロロンドのおっさんは大袈裟な相槌を打つ。

……でも、ガンダルのアレフガルド歷程や、その人が残したメモの話を聞いていると段々と静かになって行く。

「あ、他にもこんなメモもあつたんだ」

『シエルターの中では食料不足で苦しい中、魔物を恐れて外に狩りへ出かけないにも関わらず、ときおり肉が提供される事がある。』

だがアレは決して口にはいけないと心の中で警戒が鳴り響く。

近い内にここから出ていこう。人として終わってしまう前に』

『なかよくしなきゃいけないのに、みんなはけんかをする。なぜかひにひにひとがすくなくなる。ぼくよりもちいさいことからじゅんばんにいなくなっていく』

『きょうもまたひとがいなくなつた。』

どうしてだろう?このじょうさいのなかにはまものはいないはずなのに……。じつはきょうのよる、おとなたちからよびだしをうけた。

いつたい、ぼくになんのようながあるんだろう……』

「つて書いてある。食料が無いのに、なんで肉……?」

あれ? どうしたのロロンド? 顔が真っ青だけど?」

「……あ、いや……うむ。大丈夫だ。お前さんはまだ知らんで良い。いや、知らないままの方が良い」

「変なロロンド……」

一体どうしたんだろうか？

そんな風に思つてるとプリンに呼ばれ、部屋を作つて欲しいと頼まれた。

どうやらケツパーが夜、警備をしているのが気になったり、ロツシは夢見が悪いのか呻いたり悲鳴を上げたり、ロロンドのおっさんのいびきが煩いとか……そんな訳で個室を作つて欲しいので作つてあげた。

何か作つてるらしく、何を作つてるのか聞いてみたけど「ひ・み・つ♪」とはぐらかされてしまった。

ロロンドに再び合うと、メルキド録で何か分かったらしい。多少顔色は良くなり、少し興奮している。

「そうそう、ビルドよ、メルキド録を読み進めてみたのだが……」

なんでもこのメルキドにはこの地を支配する魔物の親玉なるものがおり、その魔物を倒すことで空の闇を晴らすことができるというのだ！

もう一つ大きな目標ができたな！

魔物の襲撃から町を守るべく町の防御力を更にさらに強化しつつ、魔物の親玉を倒す

ためにより強力な武器や防具の作成に努めるのだ！

石の守りの完成は我らの次なる一步の出発点となるだろう。

素晴らしい!! 素晴らしすぎるぞ! ぶわーっはっはっは! どわーっはっはっは!

……ところでビルドよ、そなたに探してもらいたい者がおる。

メルキド録によるとかつてメルキドには伝説の鍛冶屋ゆきのふなる人物がおり、その遠い子孫が今もどこかで生きておるようなのだ防壁だけでなくより強い武器を作って貰おうと思う。

いつの日かこの地を支配する魔物を倒すためにも、なんとか伝説の鍛冶屋の子孫を見つけ仲間になりたい。その男の情報が集まりしだい、おぬしに搜索を依頼することになるだろう」

「分かった、それまでは町を発展させることに集中するよ。」

空いてるスペースに設計図『おおきづちの台所』を広げ、建てる。

『ツボ』ロロンドのおっさんとドラゴン退治したときの近くで手に入れたな。

『石の階段』俺が目覚めた地下室の階段を持ってきてた。

『木の扉』ピリンと使ってる寝室を藁の扉に交換するればいい。

『カベかけ松明』が二つ、帰り道に手に入れた『カベかけ松明』を使えば良いだろう。

『料理用たき火』現在使っているものをここに置けばいい。

『食器』『石のテーブル』4つ『石のいす』2つは石で作ろう。

『収納箱』は料理たき火と一緒にこっちへ移す。

『サラダプレート』は森のサラダを食器に乗せる。

「よし、完成だ!!」

「うわあ、凄いよビルド!!」

「なんと……!! ……む? この部屋ができてから、拠点で腹が減ることはなくなつたぞ」

「部屋の効果か?」

「かもしれないな、となるとこれはいいかもしれない。

流石に吾輩たちも拠点から出て素材集めをせねばならんから腹が減るのは仕方ないが、拠点での作業で腹が減らなくなるのは大きな効果ではないか」

確かに、町中での作業がずっと楽になるな。これを『ごほんどころ』と名付けよう。

『料理たき火』『収納箱』『テーブル』系が2つと『いす』系が4つ、『かざり料理』系さえあれば設計図通りじゃなくても済みそうだ。

だがまだ時間がある……ロツシの所にも行こうか。

「俺は町を大きくするのは反対だ……だが、素材から物を作り出すのは嫌いじゃない。けどよ、今この街にある作業部屋は地味過ぎて何となくやる気が出ねえんだ。」

あそこがもつといい感じだったらやる気が起きそうな気も……しなくもねえ。

石の作業台で本格的な工房を作ってくれないか？」

との事なので、ピリンの設計で作ったあの石の工房を改造する。

『炉と金床』も設置して、『革のふくろ』とか、あとは道具屋風にしよう。

※メタ発言になりますが、『炉と金床』は今追加すると、『石と炉の本格工房』になつてしまい、『石の本格工房』を作つて欲しいロツシには認識されなくなるので注意してください。

「道具屋風に『石の本格工房』を作つてみた、まあ売り買いなんてできないけど」

「すげえ、これが道具屋つてやつか……」

「まあ、この時代じゃ物々交換だけど……」

……なあロツシ、まだ町を大きくするのは反対か？」

「……反対だ。これ以上大きくなつたら奴に潰されちまうから……」

「奴？」

「その昔、メルキドの町を滅ぼした巨大なゴーレムの事だ」

「っ!？」

ゴーレムが……？

ロッシと別れて町を歩いていると、

ピリンの「できたああ!!」という声が聞こえて来た。

「ん? 何ができたんだ?」

「町みんなへのプレゼントだよ!! ビルドが部屋を作ってくれたおかげで集中できるようになったからすぐくはかどったよ!」

「プレゼント?」

「実はわたしね、みんなのためにお洋服を作っていたの!」

「ほう、素晴らしい」

いつの間にかロロンドのおっさんが来ていた。

ロッシとケツパーも来ている。

「ね? じゃ、早速着替えようよ。 よいっしょ」

ピリンは自らの服を脱ごうと……

「「ぬわああああ!!!」 ここで着替えようとするんじゃない!!」

思わず俺達男4人はストップをかける。

「ふえ?」

「良いかピリンよ、公衆で着替えるのはとても恥ずかしいことなのだ。

ましてお前さんは女の子……気を付けるのだ」

「ピリンが世間知らずとはいえ、これは危ない所だった……あの場所”だったら何が起きたことやら……」

ロツシが頭を抱えて呟く……確かに分かる。危険な奴が居たらロクな事にならない……。

「……そういえばドレッサーを作ってたな……」

流石に町中で着替えるなんてのは駄目だから、着替えるような部屋を作るよ
そしてサクサクつとあつという間に作り出した。

「ありがとうビルド、お着換えができる衣裳部屋が完成したんだね！」

これで土で鼻栓する日々が終わるよ」

そんなに臭かったか……？

「む、臭うぞ……」

「え？ 臭う!? 身体洗うの下手だったかな……？」

「いや、邪悪な気配のほうだ……!!」

紛らわしい……気配って事は竜王軍か!?

アレフガルドの料理を復活せよ

今回の竜王軍はいつも以上にあっけなく終わった。

石の守りによる防御により大半の敵は町に辿り着いた時にはボロボロで、軽く叩けば直ぐに倒せるほど。

しかし敵の数は多かったので夜の帳《とぼり》は降りて、町に設置された『たいまつ』が頼もしい時間帯だ。

そして赤い扉も手に入れたので早速設置してみる事にした。

「とびらを設置つと」

「いつたい、どこに繋がってるんだろうな……ん？」

「何か来た!?!」

「……ここは……? ここはまさか、噂に聞いた町というものでしょうか!?!」

「あ、ああ。俺が作ったんだ」

「おお!! ということはあの伝説のビルダーなのですな!?!」

うおおおおおー!これは何という感動、なんと興奮だ!!

なるほど、ここは巨大なゴーレムを守り神として栄えたメルキドの跡地なのです！
私の名はショーター。途方もなく長い間、歩き続けてきた旅のものです」

「ふむ、ショーターとやら。　　と言うことはそなたは情報通つてことか？　それは頼もしいぞ」

「はい、ぜひとも役立たせてください」

「ビルドよ、吾輩がショーターから話を聞いておくからひとまず休んでおると良い」
「わかった。　　流石にもう夜だし、飯食ったら明日聞くよ」

言葉通り俺は食事の後、とつと眠ってしまった。

.....

.....

.....

どうやら夢を見ているらしい。

「彼女といつまでもこうしていつしよにいたい。

こんな僕の気持ちも、魔物たちに踏みじられる日が来るのでしょうか

ああ!!でもきつとあなたなら竜王を倒してくれる！僕はそう信じています！」

「彼と一緒にいると世界を闇が覆うなんて嫌なこと忘れられるわ。」

でも、それは嘘……世界が滅べば、私たちの愛も終わってしまおうって彼がそういうんです。

だけど……きっとあなたならなんとかしてくれる……。

だってあなたは伝説の勇者の子孫なんですからもの！」

カツプルの男女が言った。

「闇の竜、翼広げる時口トの血をひく者来りて闇を照らす光とならん。

……これ、僕の祖父の口癖なんです。

おお神よ！古き言い伝えの勇者となりえし者****に光あれ!!」

緑の服を着た男が言った。

遠い記憶のようだ……

そして……

《流石、伝説の勇者の血を引く***モジャ!! 僕も勇者になりたいモジャ!!》

また別の、遠い記憶。

どちらが自分自身の記憶なのか、それとも両方とも誰かの記憶なのかわからない。

ただ、二つの記憶は混ざり合いながらも……責任の重さに押し潰されそうな感情と、

冒険を楽しんでいるという感情は決して交わる事はなかった。

「朝だよビルド!! おはよう」

「おはようピリン……つてロツシ!? どうしたロツシいいいいいい!!」

「び、ビルド……危険……だ」

「危険? まさか魔物が……」

「ち、違う……ピリンの、ピリンの料理だ……」

キメラのくちばしにバツタとモモガキを入れて青い油と土で煮込んだ……。

あんなの料理じゃねえ……!! 食ったら死ぬ!! ……ガク」

ロツシは息絶えてしまった……さらば、ロツシ……。

「ロツシいいいいいい!!」

……と、まあ残りはロンドのおっさんに食わせるとして――「なぬ!?」なあピリン、そ

んなの作ってどうしたんだ?」

「私この頃、料理にこつてるの!」

最近新しい料理を開発したくつてうずうずしてるんだ!

私が考えたのは駄目だったみたいだけど……」

「いや、まず自分で味を確かめてくれよ……。しかし、料理を考えてみるか……」

今日は『赤い旅のとびら』の先に行く、その時に何かあればそれで考えよう。

出発の時。

「ビルドさん、この旅のとびらの先……ドムドローラには伝説の鍛冶屋ゆきのふの子孫とされる男がいます」

「町に鍛冶屋がいれば、より強い武器や町を守る設備も作り出すことができるであろう。」

ビルドよ、この旅のとびらの先でその男を探してきてくれ!!」

「ああ、わかった。了解だよ」

「料理♪ 料理♪ 土と青い油を煮込んで♪」

「ロロンドのおっさんに食わせとけ」「吾輩が!?!」

そんなおっさんのツツコミを背に、俺とピリンは赤い扉の先へ向かった。

そこは砂漠地帯。

「これは……【死の砂漠】？」

ふと、何故か思い浮かんだ言葉を呟いた。

「シヨーターはドムドローラって呼んでたよ？」

「ドムドローラ？ 聞いたこと無いな……メルキドの周辺の砂漠は【死の砂漠】としか伝わらなかったし……」

なんだかこの世界に残ってる記録と俺の記憶にズレが生じている気がしたが、まあ先に向かうとしよう。

ここで手に入れた目新しい物は

『砂』はそこら中にある。これから『ガラス』が作れそう。

『砂の草切れ』は枯れたような草から手に入れた。何に使えるだろうか……？

『サボテンフルーツ』はサボテンの頭や、丸いサボテンやから手に入れた。食べれる。

『サボテン果肉』はもちろんサボテンから。

そう思っていると兎と蠍の魔物『いっかくうさぎ』と『おおさそり』がこちらへ向かってくる。

【いっかくうさぎ】からは『くすりの葉』と『生肉』。くすりの葉は『やくそう』になるし、生肉は『ウサギステーキ』が作れそう。

【おおさそり】からは、『きずぐすり』と、なんと『やくそう』を手に入れた。殆ど絶滅してしまった『やくそう』が手に入るのはいい。

「ビルド、あっちにおおきづちがいるよ」

【ニンゲン！コッチだ！】

「おおきづちじゃないか」

「君が長老がいつていたビルドってニンゲンだね。

僕はニンゲンが大嫌いだけど、長老が君を助けてやれってうるさいんだ。

長老の命令じゃ仕方ない、君に道案内だけしてあげるよ。

ここはドムドローラって言ってね、もうずーっと前から何も無い場所なのさ」

「やつぱりドムドローラ……？ 死の砂漠じゃないのか……」。

そういうえば墓場を作ってるおおきづちがここに墓作りができるブラウニーがいるって言ってたな……」

「ああ、あいつも僕と同じくニンゲン嫌いだね。

……ここは何にもないけど、おおきづちの里には無い、いろんな素材がある。

案内は終わりだ、さあとつと行け」

「ああ、ありがとう」

嫌いつて割には嫌悪感を抱いてる訳でもなく、単に流されて嫌っている程度なんだろう。

おおきづちに別れを告げ、俺は進む……

が……

進んでいると……あれは「ストーンマン」？ 3匹の群れ……しかも1体はかなりデカイ。

この装備じゃまともにダメージを与えられそうにない、逃げようとするが奴は追ってきた。

【おいニンゲン!! こっちだ!!】

アーチ状の岩場にもおおきづちがいた。

梯子をかけて上に登ればストーンマンもあそこまでは追ってこれない。

【長老から話は聞いてるよ!!】

眠たそうな顔をしたニンゲンたちが来たら助けてやれって】

「眠たそうって……」

「確かに……」

ピリン、否定してくれないの……。

【……それにしても、おおきづちの里があるメルキド地方から来たなんて、随分と長旅

をしたんだね!】

「そんなに遠くなのか此処!?!」

「私達、『旅のとびら』で来たんだよ」

【んあ!?! そりやまた、ツゴウのいいドウグじゃないか! ……いいなあ、オイラも早

くおおきづちの里に帰りたいなあ……

『旅のとびら』の許可が下りてる郵便係の仲間が羨ましいぜ……!】

「ねえ、なんであなたはここにいるの？」

ピリンが不思議そうに問う。確かに俺も気になる。

「……オイラたちは竜王さまの命令で、ピラミッド作りにかりだされてたんだ。

毎日毎日、素材集めをさせられて……もうクタクタだよ……そうだ、お近づきの印にオイラの宝物をやるよ」

そういつて『命の木の实』をくれた。

ストーンマンの一団が諦めて去った後、礼を言つて別れを告げる。

それから『鉄』を求めて山を掘っていると、ピリンが何かを発見した。

「ねえビルド、こんな砂漠なのに緑と水があるよ？」

「ん？ あれは……オアシスか？」

目の前には海水ではない水が沸いているのか木が生え、一部分だけ緑々《おおおお》とした大地がある。

近づいてみると……男がこんなところでおしゃれなテーブルで食事をしていた。

『ふんふんふん♪ ……へえ、君は私の姿が見えるのかい？ これはなんとも珍しい』

「つて事はあなたは、幽霊？」

『そう、私は幽霊。私が見えるとは君は少し他の人間とは違うようだな……』

「ビルド……何しやべってるの……？ あれ？ 薄っすらとだけど、人がいる……？」
ピリンも見える？」

『ふむ、どうやらその女の子も少し違うのかな？』

「あんたはなに者なんだ？」

『私かい？ 私は生前、料理の研究をしていた美食屋でね。』

長年の研究の末、ついに至高の調理器具『レンガ料理台』を作り出せたと思ったら、美味しい料理を求める魔物に襲われ、命を奪われてしまったというわけさ、

料理というものは魔物をも狂わせる。君も気をつけたまえ……』

その時だった、二匹の【てつきそり】が現れる。

「つきや!？」

「サソリだらけだなこの砂漠!!」

俺は『トゲわな』をまきびし感覚で地面に設置しながら距離を取り、追ってくる奴らがピリンによって殴られ、床からのダメージを受け、ピリンへ意識が向いた瞬間に俺がどうのつるぎの回転斬りで簡単に倒せた。

「ふう」

『……おや？ 魔物を倒してしまったのかい？ 君たちもこちらの住人になれる所

だったのに……』

「なんてこと言うんだあんた!」

「ところでその『レンガ料理台』ってなあに?」

怒る俺をさて置き、ピリンはさっきの言葉に疑問を問う。

『まあせっかくだし良いだろう。』

私が長年続けてきた、料理の研究とその極意を受け継いで、これからこのアレフガルドの世界で、

最高の料理人を目指してくれるなら教えてやろう。

どうだい! 悪い話じゃないだろう!?

アレフガルドの料理を復活せよ! って奴さ!』

「いやタイトル変わっちゃうぞ!!」

思わずツツコミを入れる。 って勢いで言ったは良いが、タイトルってなんだ、タイトルって……。

「それに俺達は物作りで忙しいんだ、最高の料理人は別の人に任せてくれ」

『だーだー!! 料理だって立派な物作りじゃないか!このオタンコナスめつ!!』

料理はただ、空腹をみたすだけでなく、人の心に光をあたえるものなのだ。

君がもし、この世界を救おうとするなら、私の料理を継承し、作り出していつてほしい!!』

「誰がオタンコナスだ!! それで、『レンガ料理台』の作り方は?」

『料理用たき火』に『レンガ』5つ、『鉄のインゴット』だ』

「そうだ、ここに建物作るから、ピリンはここでレシピを教わると良いよ(つていうか教わってくれ)」

「レシピを?」

「さつき攫われたばかりだからちよつと不安だろうけど、いざとなったら『キメラの翼』を使ってくれ」

そしてピリンと別れ、俺は目的地へ向かう。

それからしばらく……

建物のような物が見えてきた頃、一人の上半身全裸の男がいた。

「ん? あのおっさんが鍛冶屋か?」

俺が時たま夢見る『記憶』にある知識に存在する鍛冶屋もこんな感じだった。

……何故か剣を使っているのにも関わらず、鍛冶屋がメンテナンスする事のない剣を使っていたけど……。

手入れせずに最後の戦いまで使うなんて、どんな剣だろうか……?」

そんな事をぼやきながら男に声をかけた。

「おーい、あんたが伝説の鍛冶屋ゆきのふの子孫か？」

「む？ ……ああ、いかにも」

「よかった、実はあんたに——うわん!？」

足を踏み出した途端、足元の土が崩れた……。

「な、なんだこれ……？ 毒、沼？」

崩れた土の下には毒沼があり、じわじわと体力が減っていく。

「なあ、ちよつと手を貸して——つが!？」

見上げた時、鍛冶屋が斧を振るっていた。

「ふはははは、間抜けな人間め。もうこの姿は必要ないな」

鍛冶屋は高らかに笑いを上げると、姿は闇の霧に包まれて「あくまのきし」へと姿を変えろ。

「変身魔法のモシヤスカ!!」

「ふはは、ご名答だ。」

ガイラから『ひびわれ土岩』を輸入してこの周囲一帯の毒沼を隠し、お前を落とすようにしておきづち共に作らせていたのだ!!

ふははははは……「ふっ!？」

「足元がお留守だ。……俺もだっただけ」

奴がいたら話している内に、トゲわなを設置してダメージを入れていたんだ。

【バカな……きさまあ!!】

あくまの騎士が再び斧を振りかざした時、水平に切り裂いた後、縦に切り裂く……。

「十文字『悪魔斬り』!!」

悪魔系へ特化させた斬撃を喰らわせる。

それと共に『どのつるぎ』は耐久力がなくなつたのか、バラバラに砕け散つた。

【お、おのれ人間め……そのような技を……!!】

鍵を落として奴は消えた。

まあ、咄嗟に思いついた技だったんだけどな。

しかし、とうとう武器が無くなつちまつた。

所でなんのカギだ？ その建物のか？

そう思つて建物に近づくと声がした。

「おーい、そこに誰かいるのか？」

「ああ」

鍵を開け、扉を“回収”して入る。

そこには先ほど、あくまの騎士が化けていた男がいた。

どうやらこの人が本当の伝説の鍛冶屋の子孫なんだろう。

「お前さん、その扉を開けたって事はまさか「あくまのきし」を倒したってのか？」

「ああ、俺はあんたを探しに来たんだ。あんたが伝説の鍛冶屋の子孫なんだろう？」

「俺を……？ 確かに俺が伝説の鍛冶屋の子孫、ゆきのへだ。」

お互いの話は道すがらするとしよう。まずはお前さんの町に……」『残念だがそれ

どころじゃないよ』

「っな!？」

俺は驚いた。

何故なら目の前にいたのは料理人の幽霊だったからだ。

『お嬢さんが攫われた』

ピリンが誘拐された……そんな言葉が告げられたのだ。

攫われたピリン

「ピリンが……攫われた!？」

「ああ。この北の山脈を超えた所にいるだろう」

「いざとなったらキメラのつばさを持たせていたんだが……」

「目を離れた際に創作料理を……あんなもの、料理じゃねえ……!!」

料理人の幽霊と言葉を交わしていると……鍛冶屋の子孫ゆきのへ が変な物を見る顔をしている。

「なあお前さん、突然驚くわ叫ぶわ、どうしたんだ……?」

忘れてた……普通の人に幽霊は見えないんだったな……。

「えつと、実は……」

とりあえず簡単に説明する。

「幽霊が見えるとか頭を心配するが……まあ、ビルダーならあるのかもしれない」

俺もそう思う、幽霊が見えるとか確かに頭おかしいな。

「ふむ、よしビルド。ワシが一緒についていこう。」

ワシは言ったように伝説の鍛冶屋の子孫だ。 伝え聞いてきた鉄の武器の作り方を

教えてやるぜ」

俺たちは武器と防具を作る。

『てつのつるぎ』は『鉄のインゴット』1つ

『おおかなづち』は『鉄のインゴット』2つ

『てつのよろい』は『鉄のインゴット』2つ 『毛皮』 『ひも』

『てつのたて』は『鉄のインゴット』 『木材』

それで出来た強力な装備を二式作り上げ、俺達は装備していざ乗り込む……

「ゲレゲレちゃん今だよ!!」

「フニャー!!」

ピリンがデカい猫と一緒に戦っていた。

猫は黒い斑点のある黄色い毛皮に、赤いたてがみが特徴的だ。

「トドメよ!! 『ばくれつけん』!!」

拳による四連打がドラゴンにヒットし、ドラゴンは断末魔の叫びを上げながら倒され

た。

「ビルドよ……あの娘がピリンという娘なのだろうか？」

ゆきのへのおっさんが戸惑うのも分かる。

現に俺自身も凄く戸惑っている。

「あ、ビルド。 どう？ 私も強くなっただよ!!」

「あ、ああ……」

「ほら見て、力持ちいー!!」

でっかい猫を片手で持ち上げて力自慢をする。

「お、おお……!?!」

「なーんてね？ 実はこの料理を作ったの!! 『うさまめバーガー』 っていうんだ。

うさぎ肉と豆をパンに挟んだの。 すっごく美味しくて、一時的だけど力も強くなる

んだよ」

そんな風に嬉しそうに話す彼女の隣に料理人の幽霊が現れた。

「はあ……その代わりに犠牲になった食べ物の量は凄かったのだがね……」

「どうせ砂とスライムの目玉でも混ぜたんだろ……?」

「よく分かったね……」

だいたい分かる、だってピリンだもの……。

どうせ来世でも貝で「生臭さと砂のじやりじやり感が相まってとっても美味しいわ」とか言いそうだし。

「……まあ、彼女の創作に対する意欲というものは私以上だと思う。それによつて私自身ももう一つ思い浮かんだんだ。

砂から作れる『ガラス』を器に、煮込んだモモガキを入れるんだ。

そう……それは『モモガキのジャム』、私が昔作つた料理の一つだ」

※ジャムはビルダーズ発売前の動画に登場していましたものです※

「……そろそろ私もあの世へ行くか。

私の最後の弟子であるピリン、アレフガルドの料理の未来は君に託したよ」

最後に彼は『肉の飾り料理』をピリンに渡してその場から消え去つた。

「……」

「……」

「……えっと、よく分からんが、どうしてお前たちはしんみりしているんだ？」

「あ……」

再び、俺は普通の人は幽霊が見えない事を忘れていた。

数分後

ピリンが攫われた時、東の方向に離れ小島を見つけたとの事で向かっていた。

「つと言う訳で俺はゆきのへのおっさんを救い、あの料理人の幽霊に言われてここに来たんだ」

「私はいーっぱい料理教わったんだよ。」

それで攫われた時、ドラゴンに虐められてるこの子の傷を治してあげたの」

そう言うピリンは猫の上に乗っかって移動している。

この猫は魔物だろう……記憶の何処にも当てはまらない新種の魔物……

モンスターストライドか……ちよつと羨ましい。

そんな話をしてる間に砂漠地帯に繋がる細い道に繋がれた離れ小島へ辿り着いた。

「これは……墓場か」

「そういえばおおきづちの里で墓作りができる【ブラウニー】がいるって聞いたな、墓の作り方聞いてくる」

「そうか、ならそれまで俺はそこの鉱石を掘ってしよう」

「あ、じゃあ私も周りの素材を集めてるよ」

そういつてピリンもキノコなどを採取しに行った、

「了解。おーい、ブラウニー!!」

「尋ねるか……こんな所までニンゲンが来るとはな。

その苦労には頭が下がる思いだが……俺はおおきづちじゃない。

俺はニンゲンが嫌いなんだ、早く消えてくれ」

「おおきづちの里であんたなら墓の作り方を知ってるって聞いたんだ」

「……良いだろう、一度しか言わないからよく聞け『石の墓』は『石』3つで作れる」

「ああ、ありがとう」

「……所で良いか人間？」

「ん？」

「竜王様が俺らブラウニーやおおきづちに作らせているピラミッド……あれを見たか

？」

「いや、ただだけど」

「そうか。……あのピラミッドは何か嫌な感じがする……」

「……いや、お前に言ってもしかたないか。まあ気を付けとけよ」

「ありがとな」

俺はブラウニーに礼を言い、ピリンとゆきのへのおっさんと合流した。

ピラミッドと火を噴く石像

「これは……最近現れたピラミッドなる建物じゃねえか」

「凄く大きいけど、いったいこれは何なの？」

ピリンと合流した俺達はピラミッドに来た。

ちなみにピリンは猫……ゲレゲレに乗っている。

「【おおきづち】 たちが作らされたんだってさ、ちよつと気になつてな」

「ふむ……なんでも死者をまつり、魔物の王を神とあがめるための場所らしいぞ。

中にはお宝でも眠つてるって話だが、手を出さないほうが」「お宝!? 探すぞ!!」話を聞いてくれ……」

「冒険、楽しそうだね!!」

ピリンもよく分かっている。

レンガで出来た巨大な建物は迷路のようだった。

「あ、ここ土の壁がある」

「本当だ!! なにか隠してるのかな?」

「真つすぐ行かないのかお前は……」

この迷宮探索を楽しむ俺達にゆきのへのおっさんは呆れているが、仕方ないだろう？

「お、ツタがある!! なんだ何も無い……」

「ねえビルド、一つ土の壁があるよ!!」

「ナイスだピリン!! またツタがあるな」

「ねえビルド、今度は何かあったよ!!」

ピリンが見つけたツタの向こうにあった宝箱には金属製のブーツが入っていた。

「ブーツ？」

「それはメルキドブーツじゃないか!? 勇者の伝説には刻まれていないが、それは別の伝説で伝わる靴じゃないか!! それを履けばどんな高い所から落ちても無傷だ」

「凄い!! 建築に丁度いいね!!」

それから

「このピラミッド中の『カベかけ松明』を貰っていくんだ!!」

「町の灯りはまだまだ足りないもんね」

「どんだけ手に入れるつもりだお前さん達……」

と、ゆきのへのおっさんに呆れられたり。

「ビルド、今度は『暖炉』を見つけたよ」

「こんな所に暖炉だと？」

ドラゴンがソファアを落とした事もあり、細かいことは気にしないほうがいいと思うぞ？

そんなこんなで寄り道をしながらごっそりと宝物を手に入れて、一番奥深くまでたどり着く。

「なんだあれ？」

ピラミッドの最奥には、祈りを捧げる人間たちがいた。

「おお、りゆうおう様あ……」

「あんたらも祈りを捧げな」

石像に祈りを捧げる人々……りゆうおう様？

「こんなに沢山の人が居るよ」「駄目だ」

どこか嬉しそうなピリンをゆきのへのおっさんが止めた。

「あいつら……どこか違和感を感じる」

「違和感？」

そう言われると確かにこの場所に居る人々は大変な感じがした。

試しに周囲の灯りを全て取り外してみるが、穴の開いた天井の光のみになっても彼ら

は全然動じない。

「ねえ……ビルド、この人達おかしいよ……」

……その時だった。

「ん？ 暗くなつた？」

「いやまて、天井を見ろ!!」

ピラミッドの頂上は大きな穴が開いている。

だが、その大きな穴を人型の巨大な何かが塞いでいた。

そこから何かが降ってくる!!

「な、なんだあれは!？」

ゆきのへのおっさんが驚愕する。

目の前にいるのは巨大なストーンマン。

同じく初めて見ただろうゲレゲレは毛を逆立てて「シャー!!」と威嚇をするが、

ストーンマンはそんな事を動じず、前回同様殺気を立ててこちらへ来る。

……が、それだけじゃなかった。

「人間!! よくも『火をふく石像』を!!」

祈りを捧げていた人々が全員、魔物へと姿を変えた。

「!?!?!」

よく見れば、ちゃんとした服装の者達は『まどうし』へ、ボロの服を着た者達は『がいこつ』へと姿を変えている。

「まさかこいつら、竜王に魂まで売りやがったのか!？」

「追いかけてくる……!!」

早速ピリンとゲレゲレが攻撃する……が

「駄目!! この人達、どらドラゴン程じゃないけど強いよ!! つきや!!」

「にやあ!？」

数が多すぎる……

「そうだ、トゲわな!!」

ピリンとゲレゲレを追いかけるがいこつ共はトゲわなを喰らってあっけなく倒される。

「『まどうし』が火の玉撃ってきたぞ!!」

「うおっ」

トゲわなを踏まずに生き残っていたまどうしたちに思わず落ちていた『火をふく石像』を壁にする。

「「ぎやあああ!!」」

「なるほど、こういった使い方もあるか!!」

燃え上がる炎がまどうしを焼き、倒す。

だが巨大なストーンマン相手には歯が立たないようで、壁にしていた石像も破壊された。

「つく、ここは一先ず退散しよう!!」

「そうだね……私のばくれつけんでも、ストーンマン相手には難しいよ……」

「どうやらピリンのばくれつけんでも無理らしい。」

ゲレゲレも下手すりゃ爪が砕けるだろう。

破壊された石像も回収し、俺達は急いでピラミッドを出た。

息も絶え絶え、

「まさか人間が魔に落ちるとはな……いや、一部の人間は服装とかからずつと昔から魔に落ち、生きてたのかもしれない」

「どういふこと?」

「ワシのように古着とはいえこういった服を持てるだけでも裕福なのだ。」

「普通の人間ならボロの布を着るしかない」

確かに、ロロンドのおっさんと、ゆきのへのおっさんを除き、みんながみんなボロい服を着ていた。

なのに、このピラミッドに居た元人間たちの中でまどうしになった奴らは身綺麗だつ

たな。

「そろそろ『キメラのつばさ』を使うか」

「持っておったのか……」

「だつてさ、わざわざこれで帰るよりも帰り道も採取してつた方がいいだろう？」

「ちよつと怖かつたけど楽しかつたしね」

俺たちは『キメラの翼』を使い、町へ帰るのだった。

「しかし、ここが嘗て城塞都市メルキドがあつた場所か……」

「最初は完全に跡地つて感じだつたけどな」

「ほう……やはり巨大なゴーレムに滅ぼされたというのは本当だつたのか……」

「ゴーレムはメルキドの守り神つて聞いたけど？」

「メルキドが滅びたのは何百年も前だ、実際のところ、何があつたのかワシは知らん。

だがな、メルキドの生き残りが語り継ぐ話だそうだ……」

「おお、帰つたかビルド!! ピリンもよく無事だつた。

そして貴方が伝説の鍛冶屋の子孫だな？」

「ただいま、みんな!!」

それからみんなで飯を食う時に色々話した。

新しい料理を食べ、今回の旅の話をつまみにして。

そういうえば『パン』はケツパーと旅した時に小麦を手に入れたが、料理用たき火じゃ作れなかつたんだ。

更にこれを飾りように『パンとカゴ』を作れば、新しい部屋が作れるかもしれない。ピリンのちゃんと食べる料理で『豆乳』が作れるようになったのも良い。

『豆乳』栄養価も高いし、食事時の牛乳感覚で飲める。

そうだ、『きのご豆乳スープ』なんかもできそうだ。

「そうだ口ロンドのおっさん『火をふく石像』っての手に入れたんだ」

「おお!! それがあれば『はがねの守り』が作れるぞ!!」

「しっかし大丈夫なのか? ロツシや、ゆきのへのおっさんが言ってたんだが、

町を発展させれば、ゴーレムによって町が滅ぼされるとか言ってたが……」

「ぬわっはっは! 心配するな。おぬしの物作りの力と、吾輩の頭脳、そしてメルキ

ド録録があれば、

メルキドを復活させ、魔物の親玉を倒すことも夢ではあるまい。

吾輩に全て任せておけ! わーっはっはっはっはっは! ごほ、げほっ!」

それから数分後、敵が攻めてきたりしたが……まあ大した事は無かった。何せ強力な武器や石像などのトラップによる防御により殆ど安全に戦えるのだから。

戦いに備えて

いつもの戦い。

敵はトゲわなだらけの道を進んで傷つき、火を噴く像で焼かれ、

それを口ロンドのおっさんたちが攻撃して倒す。

そんな倒される捨て駒を扱う上の奴らをゲレゲレに乗るピリンが倒す。

そして俺が敵の大將と一騎打ちでトドメを刺す。

いつも通りでありながら、最近は頻繁にくるようになった。

「……しかし、こうして攻めてくるって事は竜王軍も焦ってきているってことか」

ゆきのへのおっさんが腕を組みながら呟く。

「竜王が世界を牛耳って数百年……人間が巻き返しを図るチャンスかもしれない」

ビルドよ……もうそろそろこのメルキドにかかった空の闇を晴らすために、メルキドを支配する魔物の親玉を倒す準備を進めてもいい頃かもしれないぞ」

「親玉を……? でもどうやって? ただでさえ、あの巨大なストーンマン相手には

歯が立たないのか?」

「実はな、ワシが先祖から伝え聞いた『神鉄炉と金床』なる究極の炉がある。

その炉があれば『鋼』を加工し、強力な武器や防具が作れるはずなのだ」

「その話、僕からも良いでしょうか？」

ケツパーが会話に入ってくる。

「ケツパー？」

「戦いに備えて衣裳部屋に武器や防具などを揃えて欲しいんです」

「うーん、ならもう一つ衣裳部屋を作って、そこに装備を揃えよう。」

武器や防具はゆきのへのおっさんが言う『神鉄炉と金床』で作った物を設置する」

「……強い武器か……お前さん、おおきづちの里の奥にある壊れた城塞に行ったことがあるってな」

「ああ、シエルターだろ」

「僕も一緒に行きました」

「聞くところではワシの先祖のひとりもあの城塞の中で暮らしていたらしくてな。」

なんでもあの城塞の中では人間同士が争いを繰り返していったらしい……。

お互いがお互いを信じられなくなり、やがては自分たちが作った武器を取り合っ

……」

「……だから、あんな死体だらけになったんですね……」

魔物じゃなくて、マモノがいるって言っていたのか……

「そんな人間をみて、メルキドの守り神だったゴーレムはどう思っただろうな。

ひよつとすると、そのあたりにメルキドの守り神だったはずのゴーレムが、メルキドを滅ぼした理由があるのかもしれない……」

「メルキドについていたという巨大なゴーレムの守り神が……？」

かつてのメルキドの兵士たちがメルキドの町を守り切れなかったのはもしかして……」

ケツパーの頬に少し嫌な汗がツウツと流れる。

……でもおかしな話だな。

シエルターに人々が逃げた時にはゴーレムがついて来たのに、なぜその後にメルキドが滅んだんだ？

……当時のメルキドにゴーレムがいるならシエルターに逃げる必要はなかった筈。

そしてシエルターへゴーレムを連れていく必要もなかったんじゃないか？

……いや、最初は本当に竜王軍によってメルキドは滅びかけたのだろう。

ゴーレムを連れてシエルターを作り、いつしか疑心暗鬼になった人々のシエルターにガンダルは訪れ、危険を感じてシエルターから出て行った。

その後、最後に人々はお互いを傷つけ合い、それに怒りを覚えたゴーレムによって滅ぼされたのだろうか……？

そんな事を考えながら俺達は『神鉄炉と金床』を完成させ、多くの武器と防具の生産、そして武器庫を作り出しているとロツシが訪れた。

「『神鉄炉と金床』か……とうとうこんなものまで作っちゃったか……まあ良い。ビルド、お前に頼みたいことがある。

ここにオレが書いた遠くまで見渡せる見張り台の設計図がある。

この見張り台を設計図通りに作ってほしいんだ」

「ならこの専用につった武器庫の屋根に作ろう」

この武器庫はいつも魔物が攻めてくる方向入り口付近に作っている。

簡単に言えば窪地にあるメルキドを蓋するよう1階に作っているんだが、(町自体は

地下1階状態)

それより上なら見晴らしが良いだろう。

「ところで見張り台で魔物を監視してくれるのか？」

「ああ、そうだ……この町に『あいつ』が来たら、直ぐにここから逃げ出せるようにな。

……ゆきのへに聞いただろ？　メルキドは守り神だったゴーレムに滅ぼされたんだって。

このメルキドで人間が栄えたら、必ずゴーレムがきて、全てを破壊する……。

オレはガキの頃からずーっとこの話を伝え聞いてきたんだ！

ビルド……ロロンドが言ってたぜ。

このメルキドを本当に解放するには、ここを支配する魔物の親玉を倒す必要があるって」

「……ゴレムの事だな……？」

「ああ、間違いねえ……その魔物の親玉こそ、メルキドの守り神である巨大なゴレムさ！

もう、いつゴレムが来てもおかしくねえ。

オレたち人間じゃゴレムには勝てねえぜ。

ビルド……悪いことは言わねえ。 お前もいつでも逃げれるように準備しておけよ！

「いいや、俺は戦う。

だって、例えばデカイゴレムだろうと倒さなきゃ、このメルキドの平和は戻らないんだろ？」

「ビルド……」

ロツシがつぶやく中、ロロンドのおっさんが声をかけた。

「ビルドよ!! 喜ぶがよい!!

吾輩はついにメルキド録を読み解き、『火をふく石像』を使った強力な防壁を編み出したのだ!!

吾輩が編み出した『はがねのまもり』なら、この町をさらにさらに、強固に守れるだろう!

さあビルド! この設計図通りに『はがねのまもり』を完成させるのだ!

「でもこれ、『はがねの大とびら』なんてあるぞ?」

「む……おぬしなら思いつかぬか?」

「うーん、まあできそうだな」

『はがねの大とびら』は『はがねのインゴット』を6つに『染料』でもあれば作れるだろう。

「よし、できた」

「ぬおおお! ついにできたかビルド!! これならどのような魔物が来ようと守れるぞ!!」

「でもよ、ゴーレムが来たらどうするんだ? 魔物の親玉になってるんだらう?」

「何を言つとるビルドよ、ゴーレムはこのメルキドの守り神だったのだ。」

ロッシに何を吹き込まれたか知らぬが、ゴーレムが我らを滅ぼす筈がなからう。

ましてやゴーレムがメルキドを支配する魔物の親玉など……吾輩は絶対に信じぬぞ！！

……まったく、根も葉もないウワサで、みんなの不安を煽りおって……。

ああいう存在は町の発展の邪魔になる。いずれ処置を考えなければならんかもしれんな……」

処置って……確かにロツシの話も、直に見たわけではないが……だが……。

「とにかく！ よくやったぞビルド！ 素晴らしい防壁ができたな！ わーっはっはっは！！

そしてビルドよ、吾輩はついにメルキド録に書かれた、最強にして、最大の防壁の記録を見つけたのだ！

その名も『メルキドシールド』という！ なんともおごそかで品のある名の防壁であろう！」

「そうか……？」

「これさえあれば、どんな魔物の攻撃からも町を守ることができる。

かつての城壁都市メルキドを完全に復活できるのだ！

しかし……だ……

その細かな製法まではメルキド録にも書かれてはおらぬようだな。

このままではせつかくのメルキドシールドも作り出すことはできぬ……。

そこでだ！ 製法の断片だけはビルダーのおぬしに伝えておく。

おぬしならいつか『メルキドシールド』の作り方をひらめいてくれると信じておるぞ
！」

それからも竜王軍が攻めてくる。

新しい武器や罠、そしてこの戦いに特化させた町のお陰で戦闘もしやすくなっていた。

そんな中、新しい人がやって来た。

「あらあらあら！ ここはなんなの？

暖かい光が溢れる素晴らしい場所じゃない!!

……あなた随分と冷めた目ね。いいえ……冷めすぎて逆に熱を持った目だわ。

……分かってるわよ？ 今さら新顔かって、そう思っているんでしよう？

だってそう顔に……いいえ、全身に書きなぐつてあると言つて良いくらいだわ。

「いや、そういうわけじゃないが……」

「ここには建物もあるし、人もいる。」

それでも住んでいる人たちは随分ピリピリしているみたいね。

でも私、数日前からここに光が溢れてるのに気付いてから、ずっと目指して歩いてきたのよ……

もう歩き疲れてヘトヘトなの……今日からここに住まわせてもらうわ。

私はチェリコ……何のとりえもないけれど、空気だけは読める女よ……よろしくね」

「あ、ああ……よろしく。俺はビルドだ」

「あれ？ お姉さん、新しい人？」

わたしはピリンだよ、よろしくね!!」

「あらよろしく」

「あ、そうだビルド、最近なんだかみんなピリピリしてて怖いね……」

「まあ、決戦を感じてるからだろうな……」

「うん、ロロンドにも聞いたよ。

もうすぐ、でっかい魔物との戦いがあるんでしょ？

わたしはただ、みんなで町を作って、楽しく暮らしたかっただけなのに、

どうして、こんなことになっちゃったのかな……」

「きつと竜王軍は、人間たちが仲良く暮らす事を願っていないんだろうな……」

「……ビルド……一つ、お願いしていい？ 『やくそく』を5つ作って欲しいの」

「ん？ いいよ。……ほら」

「ありがとう……実は、私も2つ作ってたの。ビルドと合わせて7つだね。はい、ビルド……決戦の時、これを使ってね」

「え、なんで……」

「だってビルド、いつも皆の為に働いていて、自分の事は後回しだから」

「ピリン……」

「私、信じてる。ビルドが、みんなを守ってくれるって!!」

「当たり前だろ」

「ふふ、じゃ。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。」

……ピリンに心配かけちゃったな……

「……空気を読んでいたけど、お姉さんちよつと居づらかったわ……男女仲良く、物作りして……」

「っ!? あ、すみません……」

「……ところであなた、あの可愛らしい子とどういう関係なのかしら？」

「二人つきりで一つのお部屋で一夜を明かしたような特別な関係なの？」

「いややややや、それは……その……」

「あらあら、良いのよ隠さなくても。うふふ、私は大人の女だもの……」

「ぬ、ぬあああ……」
その夜、俺は中々寝れなかった。

スライムのスラタン

早朝、朝っぱらから敵が攻めてくるが……。

まあ、慣れたもの。

ロツシが直ぐに警報を鳴らしてくれて、ロロンドのおっさんが考えてくれた『はがねのまもり』で足踏みしてる敵を倒す簡単な仕事だった。

眠気も吹っ飛ばす良い運動になった。

そんな中、ショーターが新しい『旅のとびら』を見つけたらしくこちらに来た。

「おお、ビルドさん！よく魔物たちを追い払ってくれました！

これは素晴らしい！新しい旅のとびらも手に入れたんですね！

……私もロツシさんから聞きました。やはりメルキドを滅ぼしたのはゴーレムだったんですね……。

ああビルドさん、ようやく……ようやくですっ!!

ようやく流浪の旅人だった私が、皆さんのお役に立てる時が来たようですよ！

「いやいや、ショーターの情報力はいつも役に立っているけど？」

「いえいえ、大した情報ではありませんよ……。」

さて話を戻します。私は以前、旅の途中である発明家に会い『まほうの玉』なる物の製法を聞いたのです。

この『まほうの玉』があれば、来るべきゴーレムの戦いにも役立つでしょう。あなたにその製法を教えます。

『ぼくだんいし』『鉄のインゴット』『ひも』です」

『ぼくだんいし』？ もしかして「ぼくだんいわ」から手に入るのか？」

「はい、ですがお気を付けてください。『ぼくだんいわ』は爆発魔法……メガンテを使います。

使われたら辺り一面木端微塵!! まともに喰らったら命を落とします。

しかし爆発する前に倒さないと『ぼくだんいし』は落としません。見極めて戦ってください。

そうですね……「ぼくだんいわ」の中にはよく寝ているものがあるので、回転斬りで後ろから攻撃すれば一気に体力を減らせるのでは無いでしょうか？」

「ああ、ありがとう」

シューターに礼を言い、俺はピリンとゲレゲレを連れて緑のとびらへと向かう。

すっかり暗くなっているが、部屋効果『ファイアーフロア』のおかげか、松明の炎は

大きくて暗さはあまり影響にならない。

だが夜とは即ちゴーストが出るということ。

馬鹿なゴーストが「ばくだんいわ」を怒らせて……大爆発を起こした。

周囲一帯が木端微塵……。

どうするか……

そう思っていたらゴロゴロと進む「ばくだんいわ」だが、二段目を超える事はできない様子が見て取れる。

……そうか、余裕を持つて9マス程度の3段低い落とし穴に『トゲわな』を敷き詰め、そこに落とせばいいんだ!! おっと、自分が昇る1段は忘れずに……。

副産物で「アルミラージ」から逃げる時にも役立った。

それとアルミラージからとれた『上質な皮』から、ついに『はがねのよろい』を思いついた。

岩山を登って先を進んでいると森が見えて来た。

森には……小さなスライム? まだ小さいな。

「ぷるぷる……ぷくはわるいスライムだよ……」

悪いスライム? そんなに悪そうに見えないけど……

そんな風に思っているとピリンが声をかけた。

「ねえ、どうしたの？」

「わあ、ニンゲンだ!! ぼくはスラタン!! きみのなまえは？」

——僕はももんじやのモモたん!! よろしくね!!——

「なぜかそんな言葉が頭をよぎった。」

「私はピリン、この人はビルドだよ」

「ピリンとビルドかあ! すてきななまえだね!! 名前だつてりりしくてかつこいやー!」

「あはは、よく間抜けな顔つて言われるからちよつと照れる」

「……ねえビルド……。じつはぼく……。とつても悪いスライムなんだ。」

「ぼく、ニンゲンのことがだいすきで、ニンゲンとトモダチになりたいくて……。」

「なかまたちにその話をしたら、ぼくは竜王さまにさからう、わるいスライムだつて……。」

「それからぼく、みんなにいじめられて、なかまはずれにされているんだ」

「そんな話をしていると、周囲にスライム達が現れる。」

「うわあつ、気を付けてビルド!! ぼくをいじめるスライムたちだ!!」

「ケツケツケ、ニンゲンだ!!」

「今までいたぶつてやってたけど、とうとうこいつはニンゲンに味方しやがった!!」

「ブッコロセー!!」

かなりの量だ、しかも周囲のスライムは少々強い……。

「ピリン、こつちに!!」

「うん、分かった!!」

俺が掘った穴をピリンはジャンプしてこちらに来る。

だがスライムどもはジャンプできず、穴の中に落ちる。

「「ぎゃああああ!!」」

どんなに強くても正規法で戦わなければ、大したもんじやない。

あまり苦勞せず全て倒し切り、スラタンに声をかける。

「すごいやビルド、きみってとつても強いんだね!!」

たすけてくれてありがとう。ここはつよいマモノもおおいから気を付けてね!

……それじゃ、さよならビルド」

「おいちよつと待つてよ。俺の作った町に来ないか?」

「え? ビルドが作った町だつて?」

ほくもいつしよに住んでいいの? うわあ、ほんと!?ほんとにほんとなんだね!?

やったあ! ありがとうビルド! それじゃあほくもビルドの町に行くよ!!」

~~~~~

「うわあ！すごいや、すごいや！

ここが、ビルドが作った町なんだね！

……だけど、ぼくはマモノだよ？ ほんとに、ここに住んでいいの？」

「もちろんだよ。友達だろ？」

「……え？ トモダチ？ ビルド！ ぼくとトモダチになってくれるの!!」

「もうなってるだろ？」

「うわあ！ ありがとう！ ありがとうビルド！」

さて、みんなを呼ぼう。

旅先で魔物と仲良くなった話はよくしていたからきつと受け入れてくれるだろう。

「みんな、新しい仲間が増えたぞ!!」

「お帰りビルド!! 新しい仲間ってその子？」

「なんと仲間と……ってスライムだと？ だが素晴らしい、魔物との共存もまた一つの未来である。」

「ピリンもゲレゲレを連れ帰っておるしな」

「おいおい、今度の仲間はスライムか。まあ、あんたのことだ、何も言わねえよ」

「ビルドさんは魔物とも仲間になれるんですね」

「世の中には人間に好意を抱く魔物がいると聞きますが、まさか仲間になるとは……」

「ほう、スライムか。……流石にスライムに武器は持てねえな」

「ふうん……となるとこの子は私の後輩なのね」

それぞれがそれぞれの思い。

だけど険悪な空気は無くてよかった。

「な？ 大丈夫だろ」

「うん。 ぼく、町の人ともなかよくなりたいな!!」

みんなにもはなしかけて、トモダチになるんだ!」

くくく

「おーいショーター、『まほうの玉』を100個作ったぞ」

「おお、流石はビルドさん!!」

……ゴレムに勝てば空の闇も晴れる……負ければメルキドは再び滅びるでしょう。

来たる戦いの勝利を祈っています。 どうか、その『まほうの玉』をお役立てくださ

いー」

「だが、どれぐらい『まほうの玉』を量産すれば良いんだ?」

「そうですね……20個もあればゴーレムだつてきつと……!!」

「作りすぎたかな? まあ備えあつて憂いなし、大丈夫だろ」

そんな中、ロロンドのおっさんが大声を上げてこちらへ向かつてくる。

「ぬおおお! ビルドよ! ついにメルキドシールドの素材が分かつたぞ!!」

「本当か、ロロンドのおっさん!!」

「これで城塞都市メルキドを復活できる! 来たるべき魔物との決戦にそなえられよう!  
う!

思えばここまで長い道のりだつた……。

メルキド録が読み解けず、何度枕を濡らしたか。

さあビルド、いよいよこの時だ! メルキド録に記載された最強にして最大の防壁、

『メルキドシールド』を作り、きたる魔物との決戦に備えるのだ!

……つて寝てる!? 今、大事なところなのだが!」

「おっさん、長い……」

俺は長い話が苦手なのを忘れてたか? 寝るぞ?

「う、うむ。素材は『緑のとびら』の先に『オルハリコン』の鉱石が埋まっておる」

「……あ、もしかして【ばくだんいわ】の爆発でも壊れなかつたあの金属か!」

「思い当たりがあるようだな」

「だが、どうやって採掘するんだ？」

「お前さん、ショーターに『まほうの玉』を教えてもらったであろう？」

「そうか、あれならばぶつ壊せるって事か！」

「そしてもう一つは巨大な『ストーンマン』より採取できる『ゴーレム岩』だ」

「『ストーンマン』なのに落とすのは『ゴーレム岩』……？」

「それは元々『ストーンマン』を人間の言うことを聞くように作り出したのがメルキドの守り神である『ゴーレム』なのかもしれない。

そこはメルキド録に欠片もなかったわ」

「そか……しかし『オルハリコン』も『ゴーレム岩』も『まほうの玉』は必要そうだな」

「さあビルドよ！ 貴重な素材を集め、最強の防壁『メルキドシールド』を作るのだ!!」

それから……

「ぬおおおおおーっ!! ビルド!!」

ついに『メルキシールド』を完成させたのだな!!

これで、これで、これでっ!! もう魔物たちの襲撃を恐れずに済む!

あとはこの地の魔物の親玉を倒せば、城塞都市メルキドを完全に復活できるのだ!

素晴らしい!! 素晴らしすぎるぞ!!

ぶわーっはっはっは! ぬわーっはっはっは!」

「なあ、ゴーレムが攻めてこないか……？」

俺は、ロツシやゆきのへのおっさん、シューター……そしてあのシエルターの惨劇を思い出して問う。

「うむむ……おぬしはまだ、

ロツシの言う戯言を気にしておるのか……！」

ビルドよ……吾輩からひとつ、大切な話がある……

この町をさらに発展させるには、町に住む人間はしつかりと選ばねばならん。町の発展の邪魔するもの、みなを気持ちを削ぐもの……町には不要な人間だ。意味することはわかるな？ ビルドよ……よくよく考えておいてくれ」

「おい、ふざけんなロロンド!! 不要な人間なんて誰一人居ねえ!!」

あなたの言うことは分かるよ!! 直に見たことも無いんだからな。

だけど、だからってロツシを不要だなんて――」

おっさんに叫ぼうとしたその時だった。

大地が揺れる。

それは単なる地震じゃない、何かが動くような……恐ろしい地響きだった。

「うぐおおおおおおー!!? なななんだ?!? この地響きは!?

いいいいつたい、吾輩の町に何が起きようというのだ!?!」

狼狽えるロロンドのおっさん。そしてドアが開かれた。

「大変だビルド!! やつぱりこの時が来た。」

さっきの地響き……メルキドの守り神、ゴーレムが目覚めたんだ!!

まあ、まずはゴーレム本体じゃなく、ゴーレムの配下の魔物が迫ってるみてえだけだな」

「わ、吾輩たちは、勝てるのか……?」

「……勝てるかどうかはともかく、魔物を倒さなきゃ町に未来はねえ。」

さあ……最後の戦いのはじまりだ。 どうだ? 戦いの準備はできてるか?」

「ああ、大丈夫だ」

「……ええい!! 一先ず先程の言葉は置いて、とにかく町を守るぞ!」

「ふん、おっさん。 謝罪だろうが、文句だろうがそれは後で聞く。」

ビルド……お前は どうして守り神だった筈のゴーレムがメルキドを滅ぼしたと思う

?

どうして、竜王軍からメルキドを守るはずだったゴーレムが寝返ったと思う?」

「……分からない」

「ゴーレムが滅ぼしたのはメルキドじゃねえ……メルキドにいた人間なのさ」

「!?!」



「ゴーレムは壊れちまった訳でも、魔物に操られた訳でもねえ。

……ま、続きは生きていたら話してやるぜ。

とにかく今はやってくる魔物を蹴散らすんだな！」

そして、戦いの火蓋が切って落とされた。

俺とロロンドのおっさんは合流し、ロツシのもとへ向かう。

ロツシはケツパーと次の戦の話をしているとところだったらしい。

「おおビルド。よく魔物たちの攻撃を防げたじゃねえか。……ロロンド、あんたも来たか。

まだまだゴーレムの配下の魔物がこの町に迫っているみてえだ……」

「……それより先程の続きだ。聞かせてくれ」

思い詰めた様子のロロンドのおっさん、やっとロツシの話をまともに聞くようになったようだ。

「ああ……メルキドの守り神だったゴーレムがどうしてメルキドの人間を滅ぼしたのか……。」

それはな、ゴーレムが人間こそメルキドの敵だと判断したからなんだ。

お前も何度か行つたんだろう？ おおきづちの里の向こうの、あの壊れた城に」

「そのケツパーと一緒にな」

「はい、あの城塞の事ですね」

そういえばケツパーと出会った時に興味本位から向かったんだったな。

「世界が闇に支配され、竜王軍がメルキドの町に迫った時、

人間たちは最後の力で城塞を作り、シエルターとしてあそこにたてこもった。

閉鎖された城塞で長い時間暮らすうちに、人間たちは最低の争いを始めた。

限られた食料を奪い合い、些細なことで憎しみ合うそのありさまは

まさに地獄絵図だったって話だ……」

「ああ、死体は散乱していたな」

「はい、僕が全て埋葬させていただきましたが、物凄い量でした」

「なんと……」

「……そんな時だった、守り神だったゴーレムが人間を襲ったのは……。

……おっと、話が長くなっちゃったな。

さあゴーレムの配下の魔物たちのお出ました!!」

「おっと、ロロンドのおっさん、今まで集めた『本』と『メモ』だ」

俺は小屋のメモ、ガンダルの本、奪った男のメモ、子供のメモを渡した。

ガンダルはともかく、他のメモはみんなおっさんと同じように文字を奪われながらも

書いている、

だから3つのメモは軽々と読めるだろう。

「竜王軍に怯え、城塞に隠れた人々は人間同士で醜く争った……」

それを見たゴーレムは人間こそがやがてメルキドを滅ぼす敵だと考えたんだろう。

ロロンドも言っていただろ? 『ゴーレムはメルキドの守り神』ってな。

つまり人間は、そして人間が営む町は大切《メルキド》じゃねえって事だ。

竜王軍と目的が同じになった以上、ゴーレムは竜王軍をメルキドの一部として認識したのかもな。

……そして今だ。

ゴーレムはメルキドの地で再び発展しようとしている人間を見て、

もう一度、人間を滅ぼそうとしているのさ……メルキドを守るためにな」

「……吾輩が、やろうとしていたのは、正にゴーレムが滅ぼそうとする原因そのものだったのか……」

「それよりロツシ、あんたは何でゴーレムの脅威を知っていながら、どうして町から逃げないんだ?」

その瞬間、ロツシは固く口を閉じ……。

「……へへ、もちろん分かってたんだ。  
町にいたら、危険だってことは。

……けどな、お前やピリン、それに町のみんなと一緒に暮らしてみても、俺は知っちゃまったのさ。

人と暮らすのが、めっちゃめっちゃ楽しいことだって」

「ロツシ……」

「なあ頼む……頼むぜビルド!!」

魔物を……ゴーレムを倒してくれ!!

俺たちの町を、守ってくれよ!」

「当たり前だ、ロツシ……」

「……負けるなよ、ビルド」

最後にロツシの言葉を背に、俺は戦いへ向かった。

「素晴らしいぞ!! よくぞ魔物たちを追い払ってくれた!」

「なあ、おっさん……ゴーレムは……」

「……ビルドよ、もう吾輩にはわかっておる……いや、わかっておった。

このメルキドを支配する魔物の親玉が嘗ての守り神であるゴーレムと……

吾輩は認めたくなかったのだ。かつての守り神が、人を滅ぼしたなど……。

吾輩も聞いておったのだ……そして、吾輩が間違っていたようだな……。

ロツシも、吾輩も、町を愛する気持ちは同じであった。

吾輩はな、ビルド……なぜかピリンの言葉を思い出したぞ……。

あやつはよく言っておった、『わたしはただ、みんなで楽しく暮らせる町を作りたいたいだ  
け』だと」

「ああ……なあ、おっさん……みんなを、集めてくれるか？」

それから数分も経たぬうちに町人全員が集まる。

「なあ、みんなに言いたいことがある……」

ピリン、ロロンドのおっさん、ロツシ、ケツパー、ショーター、ゆきのへのおっさん、  
チエリコ、そしてスラタン。

俺はみんなを守るため、ゴーレムを倒すことに集中する。

俺は全力で勝ちに行く……【まほうの玉】は危険だから、一人で戦わせてほしい。

だから……町は守れないと思うんだ。跡形もなく、無くなるかもしれない」

「壊れたら直せば良い」

ロロンドのおっさん……

「無くなったら、また作れば良いさ」

ロツシ……

「ゴーレムを倒して、それから作ればいいんです」

ケツパー……

「あなたがいればみんなが集まります、みんながいればまた町は作れますよ」

シヨーター……

「ふん、せっかくだから全部ぶっ壊してもらって、一からまた作るつてもあるぞ」

ゆきのへのおっさん

「私はまだ来たばかりだから何も言えないけど、あんたが死んだらピリンが悲しむんだからね？」

チエリコ……

「僕、ビルドが勝つって信じてるよ!!」

スラタン……

「大丈夫だよビルド……町が例え壊れても、みんながいるからこそ町なんだよ。

……だから、頑張ってるね」

ピリン……

「行つてきます」

俺は完全武装で、最後の戦場へ降り立った。

## 戦後、さらばメルキド

「ただいま、みんな!!」

「お帰り、ビルド!!」

破壊された町の素材を集めは村人総勢でやることになった。

「まず『大倉庫』を設置してくれ、流石に不便だからな。

それで『収納箱』を川川の字に並べるんだ。

素材、ブロック、植物など、部屋家具、外装家具、内装家具、その他、と、並んで入れればわかりやすいだろう？

ああ、ピリンとチェリコは『ごほんどころ』を作つて、料理を作つてくれるか？  
結構な作業になるから、時間がかかるだろう？」

「わかつた」「頑張つてね!!」

ピリンの創作料理でなければ大丈夫だ。……創作料理じゃなければ……。

チェリコならピリンの創作料理を止めると信じてる。

その他に『まほうの玉』や『トゲわな』など戦鬪用の武器、

『設計図』『みちびきの玉』『なつかしの堅琴』『旅の扉』『作業台』を箱詰めする。



「部屋家具用は、たいまつとか『明かり』『扉』や『ベッド』と言ったものを入れるんだ」

「ビルド、『土』が多いんだが……」

「ああ、『土』は専用で箱を詰めていってくれ。土ブロックはかなり多いし、よく使う。」

『しきわらセット』とカリフォーム系で別の素材に変換もできるからな。

それと『白い岩』と『黒い岩』もかなり多くなるからこれも白と黒の岩の専用で。

他のブロックはブロック専用の箱で雑多に入れといてくれ」

「うむ、わかった」

「ビルド、素材の箱がいっぱいになったんだが？」

「それなら植物素材と魔物素材は別に作ってくれるか？」

「了解」

「なあビルド、『丸石』『小石』『きりかぶ作業台』はどうするんだ？」

「それらは植物の所に入れておいてくれ」

「ああ、わかった」

時折、魔物の邪魔が入ったが、それほど時間をかけずに分別は終わらせる。

そして、青空の下で勝利の朝食を食べながら俺たちは会話する。

町にあるテーブルを全部使い、女性陣二人に作ってもらった料理を楽しむ。

「ストーンマン」から手に入れた『ラウンドテーブル』も……だ、ゴーレム岩が欲しい時に出てきて困ったが、こうして使う時が来るとは。

そう考えているとロツシが話しかけてきた。

「……やめておけて言ったのによ。」

見てみる、地下まで殆どなくなっちゃった。

せつかくの部屋も、防壁も、何にも無くなっちゃったじゃねえか!!」

「いやあ、まさか『解体ゴーレム会社』のおおきづち社員が頑張っちゃって……なんてな」

「ふふふ……ははは……はははははは。」

これからまた新しく町を作るのが楽しみだな！

苦労かけたな。……ありがとよ、ビルド」

そう俺らが話す中、スラタンとゆきのへのおっさんが会話しているのに気付く。

「あのゴーレムがこの町の守り神だったんだよね？」

じつはね、ぼくには聞こえたんだけ。消えちゃう前のゴーレムの言葉が。

『みんなでなかよくくらしてほしい』って、それだけが自分の願いだって言ってたよ。

あのゴーレムもほんとは僕たちと一緒に暮らしたかったのかもね」

そんなスラタンの言葉にゆきのへのおっさんは、

「ゴーレムの最後か……アイツはワシらにとつては脅威だったが、思えば悲しい存在なのかもしれないな。

だってそうだろう？ アイツはアイツなりにただ、メルキドを守ろうとしただけなんだ

……。

……まあ、けど心配すんな！ 伝え聞く話じゃ、アイツも人の手が作り出した物、

きつといつかまた、みんなの手でこの町の守り神を復活させられる日も来るさ!!」

そういつてゆきのへのおっさんはスラタンを潰さない程度に撫でている。

そんな様子を見ていたら、ピリンがケツパーに戦い方を教えてもらっているのを見かけた。

帰ってきた時のことを思い出す。

『お帰りビルド!! それと、ごめんね……。』

物を作るのも魔物を倒すのも、みんなビルドに任せつきりで……。

わたしもつと強くなるよ! ビルドと一緒に物を作つて、魔物と戦えるように!』

と、だからピリンはケツパーに教えて貰っているんだ。

こんな人々の笑顔を見ている中、ロロンドが来た。

「ビルド、よくぞよくぞゴーレムを倒してくれた！」

これでこの町は救われた！　ビルドよ……ありがとう、ありがとうっ!!

……むむ?!　おぬしが持つておるその『さびたメダル』はなんだ?」

「これか?　ちよつと磨いてみよう……なんていうか、『いにしえのメダル』って感じだな」

——おお、ビルドよ。　聞こえていますか?——

「!?　ルビス?」

俺は天を見上げて聞く。

俺の様子に周りのみんなもザワザワとし始めた。

「ビルドよ……どうしたのだ」

「あ、ああ……俺にビルダーとしての力をくれた大地の精霊ルビスから話しかけられて。」

俺以外は誰にも聞こえ」

「……もしかして、女の人の声?　ビルド、私も薄っすらだけど今、聞こえたよ」

——はい……流石にこの面々でビルドだけが聞こえると、ビルドがおかしくなつたよ  
うに見えるので、

ピリン、あなたの身体を借りますよ——

返答は聞かないのか……

※精霊ルビスが女の子に無断で降臨するのは、よくある事であるがビルドには知らない話である※

「——私は大地の精霊ルビス、ビルドを遣わしたものです——」

体も声もピリンであるが、雰囲気は神秘的なそれだ。

町のみんなも真剣なそれに代わる。

「ルビス様の声、ぼくも聞こえてたよ?」

「スラタンにも聞こえるって、意外とルビス様のお告げってそんなにありがたいがたみ無いんじゃない?……」

——「今はちゃんと話を聞いてください。お仕置きです、ギガデイン!!」——

その瞬間、頭上から俺に向かって雷撃が放たれた。

「あばばばばば!?!」

——まったく、そのスライムは特別です。魔物世界の“勇者”の素質がある程度で

すが——

「スラタンが勇者? いや、それよりもギガデインは童王軍に使ってくれよ!?!」

あんた力、封じられてるんじゃないや無かったのか？」

——ギヤグ補正です、今まではその補正すら封じられていましたから——  
ギヤグすら封じていたか……。

シリアスとギヤグ、闇と光のようだ。

「——さて、よくぞやりましたビルドよ。

悲しみ嘆き、人を敵としたゴーレムが倒れた事で私の通信ができるようになりました。  
た。

さあビルド、『いにしえのメダル』を『希望の旗』の上で掲げるのです——」

いにしえのメダルが空に浮かびあがり、ルビスの雷が落ちた、暗黒の雲が晴れて光が  
降り注ぐ……。

メルキドの大地に光は戻った。

「——ビルドよ、よくやりました。

これでこの地は竜王の悪しき力から解放され、人々は自らの力で発展していくことで  
しよう。

しかし……忘れてはなりません……

この世界にはあなたの助けを待つ人が数多くいることを……——」

「空に……光が!!」

「こんなにも……広く……青く……美しくっ!」

「——さあ、宴の続きをするといいでしょう。時が来たら、お伝えします——」

「……すごい……すごいよビルド!! 空って、こんなにキレイなんだね!!」

ルビスが抜けたピリンは目を輝かせて空を見上げる。

その後、光の復活を祝い、そして俺の活躍を称える宴が開かれた。

この破壊されて、部屋も防壁も何にも無くなったメルキドで、ごちそうも豪華とは言えないけど、

楽しそうみんなの笑い声はいつまでも途絶えることがなかった。

……そして、夜が明ける。

「わーっはっはっは!! 目が覚めたようだな、ビルドよ。」

ロッシがあんなにひょうきんな奴だとは思わなかった。

今回のピリンの創作料理で吾輩はもう駄目だと思ったがな!」

昨日は楽しかった、最後にピリンの創作料理でロロンドがぶっ倒れるのもいい思い出だった。

## 寄り道デート

宴会の次の日、俺とピリンはチェリコに言われて、二人で素材集めをすることになった。

ついでに旅のお供でスラタンも連れていくことになった。

「ビルド、ピリン、あなた達二人で素材を集めに行つてくれないかしら？」

あとスラタンにできる事ないから、二人に着いていきなさい」

「よろしくね、素材を拾うぐらいなら僕でもできるよ!!」

(スラタン、あの二人の様子を事細かく、あとで私に教えるのよ? デートの邪魔はし

ちや駄目だからね?)

(わかったよチェリコ、ぼく二人の様子を覚えるよ!!)

なんかゴソゴソ話してはいたが、そんなわけで俺たちはまず『青いとびら』で素材集めを始める。

「そういえばあの場所でケツパーと出会ったんだ。 あ、前に見落とした洞窟がある



……」

そこで『世界地図』を手に入れたり、前に出会った墓守のおおきづちに会ったり。

「ドムドラーのブラウニーに、『墓』の作り方を教わったぞ」

「わあ、ありがとうビルド！」

「ねえ、どうしてあなたはお墓を守ってるの？」

俺が墓を作って、建てているとピリンが問う。

「ぼくはね、ずーつと、ずーつと昔、お腹がすいて死にそうになっていたところを、ニンゲンの助けてもらったことがあってね」

「ぼくとおんなじだね」

スラタンが共感して相づちを打つ。

「それからぼくは少しでもニンゲンに恩返しをしたくて、

死んじやったニンゲンのために、お墓を作ってあげるって決めたんだ！

ニンゲンは沢山死んじやったから、いつお墓を建て終わるかわからないけど……

おおきづちの寿命はニンゲンより長いからね。きつといつかやり遂げてみせるよ

!!

ありがとうビルド！ ぼくはまたニンゲンの事が好きになったよ！」

そして別れを告げ、進んでいく。

すると……

「ん？ 庭か？」

「おお！ ニンゲンさん、どうですか？ ワタシが作ったこの庭園は！

長老から聞いています。あなたが物作りの力を持つビルダーだと。

きつとあなたならこんな庭園、すぐに造ることができますよ！

良いですか？ 庭園を作るには『草花スコップ』を使えばいいんです。

草花スコップなら普段は素材になる草花もそのまま手に入れることができますよ！

それを地面に置いて、柵で囲えばこんな庭園をすぐに造れちゃうつてわけです。

もちろん、もしあなたがスコップを作れたらの話ですけどね」

「おお！ ニンゲン！ オイラはくやしい！ 悔しいぞ！

実はな、オイラととなりのアイツは里の造園家を目指して競っているんだが、どうやらアイツのほうが才能があるらしくてな。

長老のお題をすぐに作り上げちまったんだ！

なあなあニンゲン、なんとかオイラに庭園作りを手伝ってくれないか？

アイツのやり方にはきつとなにか秘密があるはずだ！！

アイツから造園の秘密を聞き出して、アイツと同じ庭園をここに作り上げてくれ！」

「おお、アイツと同じ庭園を作ってくれたのか！　ありがとう！　助かったぜ！

これで長老のお題は完成だ！　オイラも晴れて里の造園家になれるぜ！」

「おいおい、お前が作ったもんじゃないだろ」

「そうだよ！　そんなのズルじゃない!!」

「悪いことしちゃダメだよ!!」

「ううううるさいなあ！　そそそそんな固い事いうなよな!!」

「そうだ！　昔ニンゲンが使っていたコイツをやるから長老には黙っててくれ！」

ベンチを押し付けるように俺に渡す。　賄賂かコイツ……

「……本当にそれでいいのか？　あの【おおきづち】にはあの【おおきづち】の味があつ

て、お前はそれを真似るだけでいいのか？」

「そうだよ!!　きつと、あなたにはあなただけの良さがある筈だよ？」

「う……そう、だよな……すまねえ。　オイラ、一から造園の勉強するよ。」

もし満足のいく造園ができたら、お前たちが真つ先に見て、勉強を言ってくれ」

「ああ約束する」「うん」「がんばってね」

「2世紀後ぐらいにな!!」

「それ人間の寿命超えてる……」

「ぼく、スライムだから生きてるかな……?」

そんな話をしていると、隣のおおきづちが来る。

「ははは、見てましたよ、ビルダーさん。」

すばらしいです、ご自分の手で庭園を作り上げたんですね！

きつとあなたなら、長老の出した造園家になるためのお題もこなせるでしょう！

「ん？　ここがその造園じゃないのか？」

「はっはっは！　御冗談でしょ！　こんな簡単な庭園が長老のお題だなんて！」

（……あのおおきづち、本当に200年ぐらいかかりそうだね）

こっそりピリンが耳打ちする……同意しかない。

「よかつたら長老のお題である『おおきづち庭園』の設計図を差し上げます」

「ありがとう」

「これ、新しいメルキドの町に作ってみたらどうかかな？」

「いいかもね、じゃあ帰ったら庭園を作ろっか」

「つて訳で、いっぱい素材を集めてきたんだよ!!」

町へ帰り、ピリンが楽しそうに話す。

「ドラゴンと言えばピリンが攫われた時の事を思い出しますね」

「ああ、俺が救助された後だったな」

そうだ、ゆきのへのおっさんを救助した後、ピリンが攫われたんだったな。

そんな話をしながら、俺たちは『おおきづちの庭園』を造っている。

「なあビルドよ、噂に聞いた話じやこの世界にはノウギョウつてものがあつたらしい」

「ああ、農業つてのは自分たちで種を植えて、自分たちで収穫するんだ」

「ほう、なんだか心がおどるな。」

ワシもそろそろ鍛冶屋を引退して、いつそノウギョウで作物を育ててみてえが……

物作りが失われちまった世界だ。

今じゃノウギョウもできはしねえんだろうな……」

『土』で囲いを作つて、『ブナ原木』を4つ

『ぬの草』を4本、『いやし草のしげみ』を2本、『ももいろの花』を2本、

『きいろの花』を2本、『しろい花』を6本、

最後に『フェンス』と『かがり火』をつけて出来上がりだな。

「よし、完成だ!!」

「ほう、これが庭園か……これに水辺と木があればもつといい感じになるんじゃないか?」

「なるほど、木か……せつかくだし、もつと大きくしてみるか」

「それと『あの』おおきづちがくれたベンチも置いてみたら?」

「ああ、賄賂か。よし、こんな感じだな」  
改造も終わった。

そこにロロンドのおっさんがやってくる。

「む、ビルドよ……まさかそれは『メルキドガーデン』ではないか……!？」

「メルキドガーデン？」

その言葉を聞いた時、なんだかしっくり来た。

そういえばこれができたとき、体の傷が治りやすくなった気がする……これ、部屋の効果だろうか？

「かつてメルキドに存在したという庭園の事だ。それにしてもこれは素晴らしく美

し」

「お、そつちもだいぶ復興も終わったみたいだな」

俺は町の様子を見てロロンドにいう、

「うん、町が前よりもずっと良くなったね!!」

「そういえば俺が目覚めた地下で『黒よう岩』ってかなり硬いブロックが、『まほうの玉』で取れたんだ。

オルハリコンと同じく、『まほうの玉』じゃないと採取できなかつたんだ」

「なんと!! これでもメルキドを更なる姿へと変えられる。」

これからも、もつと発展させていくぞビルド、ピリン」

「おう。なあ、ピリン!! ……ピリン……?」

「……え? ビルド、ルビス様が……」

突然、ピリンの表情が変わる。

「——おお、ビルドよ。次の目的地が決まりました——」

「……!! 精霊ルビス?」

「——はい、町の西にある古びた祠へ向かいなさい——」

「ふむ……まさか!! ビルドよ、吾輩と初めて出会った所の近くにあった祠の事ではないか?」

「……あ!! おっさんが埋められてたあの近く!!」

「——そこは次の町へ繋がる『旅の扉』です。一度行けばもう、こちらへ戻ってくることはできません——」

その日、別れの食事会が始まった。

「と、いうわけで俺は次なる町へ向かわなきやいけないんだ」

前回の宴とは違い、みんな表情が暗かった。

「ビルドは伝説のビルダー、世界を復興させる者……」

だが、メルキドのさらなる発展のために、なんとかここにとどまってもらわなければならない

行かぬのか？

……いや、今は忘れてくれ。これは吾輩の単なるわがままだな」

ロロンドのおっさん……

そういうえばおっさんはメルキド録を読み解いて、この町を作ってきたよな。

「……それも仕方がないことだ」

ロツシ……

最初は町を否定してたのに、いつしか町が好きになつてつたな。

「ビルド、回転斬りは次もきつと役に立つ筈です!!」

ケツパー……

一緒にシエルターへ向かって、すごい冒険したよな。

「次来た時はとっておきの情報をもつてきますよ!!」

シヨーター……

お前の情報はとつても役に立ったよ。

「そういえばワシには弟子がいる。

もしかしたらそいつに会えるかもしれんぞ。その時は任せた」

ゆきのへのおっさん……

あんたの武器はすぐ助かった、ピリンを助けに行くとき、着いてつてくれて助かつ



たよ。

「ここはもう、あんたがいなくても大丈夫。安心して出発しなさい」

チエリコ……

みんなを陰ながらサポートしてくれてたな。

「ビルド……助けてくれて、それで仲間にしてくれてありがとう」

スラタン……

魔物の中でも人間と仲良くしたいっていい奴。

「ビルド……私……私ね、ビルドと一緒にいて、すっごく楽しかったよ!!

ビルドとご飯食べて、ビルドと一緒に物作りして、ビルドと一緒に……」

「ピリン……ありがとう。……大好きだよ」

そして、俺は町から出る。

装備は何一つ、持って行かない……いや、持っていけない。

ルビスによると竜王の力で何も持ち運べないようにされているらしい。

目指すは古い祠。

そこは相変わらず変わらない、ボロボロの祠。

——その光は次なる地へとあなたを運ぶ光のとびらです。

この地で得た力も、学んだことも、新しく目覚める地では通用しないでしょう。

もし、ひとたびその光の扉をくぐれば、あなたは全てを失うことになるのです。しかしビルドよ……それでもこの世界の闇を払いたいと願うなら、光の渦に飛び込むのです。

全ては精霊の導きのままに……—

「もちろん行くよ」

「ビルド!!」

ロロンドのおっさんが急いでこちらへ来た。

「おっさん……」

「ビルドよ……やはり行ってしまふのだな……だが、もう少し待ってくれ。

「ピリン!!」

その声をかけると同時に、物陰からピリンが現れる。腕にはスラタンを抱いてだ。

「私、もつとビルドと一緒にいたい!! ビルドと離れたくないの!!」

「ぼくもついていく!! だって、ビルド一人じゃ心配だよ!!」

「ピリン、スラタン……」

「ぼく、新しい技を覚えたんだ!! 『スラストライク』って技なんだ!!」

そういつてスラタンは近くの土ブロックを破壊する。

「私もビルドみたいに作ったりできるように、戦えるようになったの!!」

だから、私たちを一緒に連れてって!! お願い……」

「二人とも……」

——二人を、連れていきますか? ——

「……わかった、一緒に行こう!!」

「ビルド……!!」

ピリンは俺の胸元に抱き着き、スラタンが頭の上に乗る。

「よかったよかった。」

ビルドよ、この世界にはビルダーであるおぬしの助けを待つものが多くいる。

さらばだビルド! また会おうぞ!

ぶわーっはっはっはっ……うっうっうっ……」

そんな口ロンドのおっさんの泣き顔を最後に、

俺たちは光に包まれてこのメルキドから消えるのだった。